

平成29年度  
文部科学省委託調査

# 「大学教育改革の実態把握及び分析等 に関する調査研究」

— 学修成果の把握として行われる  
アセスメント・テストの  
実態に関する調査 —

調査報告書

平成30年3月

株式会社 リベルタス・コンサルティング



# 目次

第1章 調査概要 .....	1
1-1 調査目的 .....	1
1-2 調査方法 .....	1
第2章 アンケート調査 .....	2
2-1 調査概要 .....	2
2-2 実施しているアセスメント・テスト .....	3
2-3 アセスメント・テストの導入状況 .....	5
2-4 平成28年度のアセスメント・テストの活用実態 .....	14
2-5 アセスメント・テストの実施上の課題・工夫点 .....	27
2-6 まとめ .....	39
第3章 ヒアリング事例調査 .....	41
3-1 アセスメント・テスト提供機関に対するヒアリング調査 .....	41
3-2 大学におけるアセスメント・テスト活用事例 .....	49
第4章 分析・考察 .....	66
4-1 アセスメント・テストの活用の分類 .....	66
4-2 アセスメント・テストの活用状況 .....	67
4-3 活用におけるポイント .....	68

## 第1章 調査概要

---

本調査研究は、文部科学省高等教育局からの委託を受けて実施したものである。調査概要は、以下の通り。

### 1-1 調査目的

我が国の大学においては、中央教育審議会の各種答申等を踏まえ、多年にわたり様々な改革が行われ、議論も重ねられてきている。また各大学においては、教育内容の改善や授業の質を高めること等を目的とした教育改革の取組が積極的に行われている。

大学改革のさらなる推進のために学修成果の可視化及びその活用が重要であり、改革が進む大学における学修成果を把握する仕組みとして、国内におけるアセスメント・テストの実態を把握し、教育改革の取組と教育現場の状況が乖離しないよう政策のPDCAサイクルを図る必要がある。

以上のことを踏まえ、学修成果の把握として行われるアセスメント・テストの実態に関する調査分析を行うことを目的とする。

### 1-2 調査方法

#### 1-2-1 アンケート調査

平成 27 年度「大学における教育内容等の改革状況調査」においてアセスメント・テストを実施している大学を抽出し、アセスメント・テストの実施状況（対象者数、実施時期等）、成果把握後の活用方法、効果、課題等についてアンケートを実施した。

#### 1-2-2 ヒアリング調査

上記の結果を踏まえ、ヒアリング等により、特徴的な取組事例を収集した。

## 第2章 アンケート調査

---

### 2-1 調査概要

#### 2-1-1 調査対象

文部科学省「平成 27 年度 大学における教育内容等の改革状況について」において、「外部の標準化されたテスト等による学修成果の調査・測定（アセスメント・テスト等）」を実施しているところへ回答頂いた大学 250 大学(大学院大学等、大学院での実施を含む)を対象に調査を実施した。

#### 2-1-2 調査方法

メール（電子媒体）による配布・回収を行った。

#### 2-1-3 実施時期

2017 年 11 月 28 日（火）～2018 年 1 月 18 日（木）

#### 2-1-4 回収数

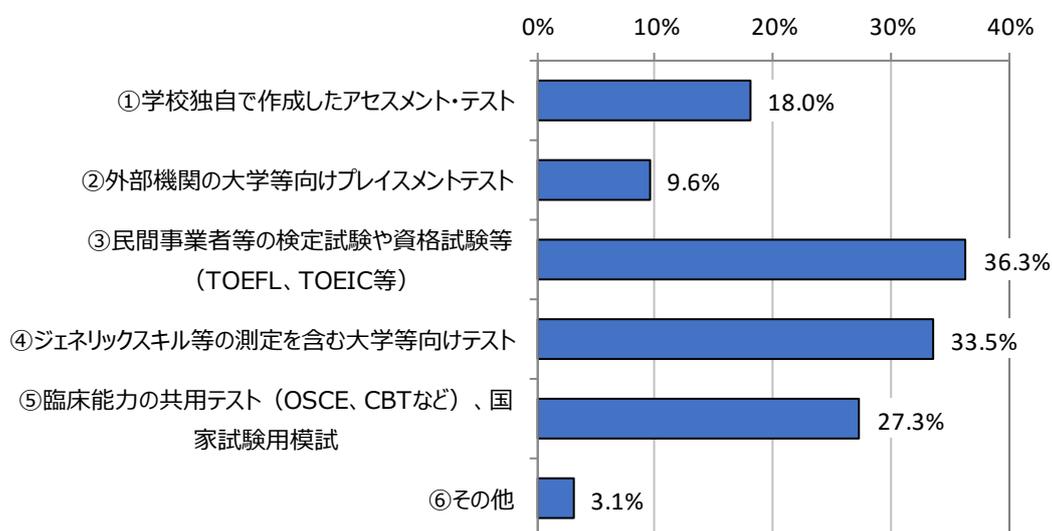
213 大学 355 組織（学部等） から回収を得た。

（大学ベースの回収率 85.2%）

## 2-2 実施しているアセスメント・テスト

回答大学（学部等）が実施しているアセスメント・テストの種類をみると、「民間事業者等の検定試験や資格試験等（TOEFL、TOEIC 等）」（36.3%）、「ジェネリックスキル等の測定を含む大学等向けテスト」（33.5%）、「臨床能力の共用テスト（OSCE、CBT など）、国家試験用模試」（27.3%）の割合が高い。

図表 2-1 学修成果の把握のために実施しているアセスメント・テストの種類  
(n=355：複数回答)



なお、各アセスメント・テストの具体的な内容は、下記の通り。

種類	回答例
①学校独自で作成したアセスメント・テスト	学内模試、必須学力統合試験(総合学力試験)、学生の学修に関する実態調査アンケート、新入生に対する学力確認試験、専門知識習熟度テスト、基礎能力テスト、KITスタンダード検定
②外部機関の大学等向けプレイズメントテスト	プレイズメントテスト、IRT診断テスト、VELC テスト、Achievement Test、EMaT 工学系数学統一試験、SPI
③民間事業者等の検定試験や資格試験等 (TOEFL、TOEIC等)	TOEFL、TOEIC、土木技術検定試験、統計検定試験、全経簿記試験
④ジェネリックスキル等の測定を含む 大学等向けテスト	PROGテスト、大学生基礎力レポート、学生共通調査(大学IRコンソーシアム)、コンピテンシー診断「SPROUT」
⑤臨床能力の共用テスト(OSCE、CBTなど)、 国家試験用模試	医療系大学間共用試験(CBT・OSCE)、薬剤師国家試験模擬試験、全国看護師国家試験模試
⑥その他	大学入試センター試験問題集、e-ポートフォリオ、ルーブリック、学生授業アンケート、学生意識調査

以下、アセスメント・テストを主として知識や基礎学力の測定のためのテスト（上記①②③のいずれか、または複数。n=129）（以下「知識・基礎学力測定テスト」という。）、主としてジェネリックスキル測定のためのテスト（上記④。④と①②③のいずれかを組み合わせて実施することもある。n=119）（以下「ジェネリックスキル測定テスト」という。）、主として臨床能力共用テストや国家試験用模試（上記⑤。⑤と①～④のいずれかを組み合わせて実施することもある。n=97）（以下「臨床能力共有テスト・国家試験用模試」という。）の三つに分類し、その特徴をみていく。

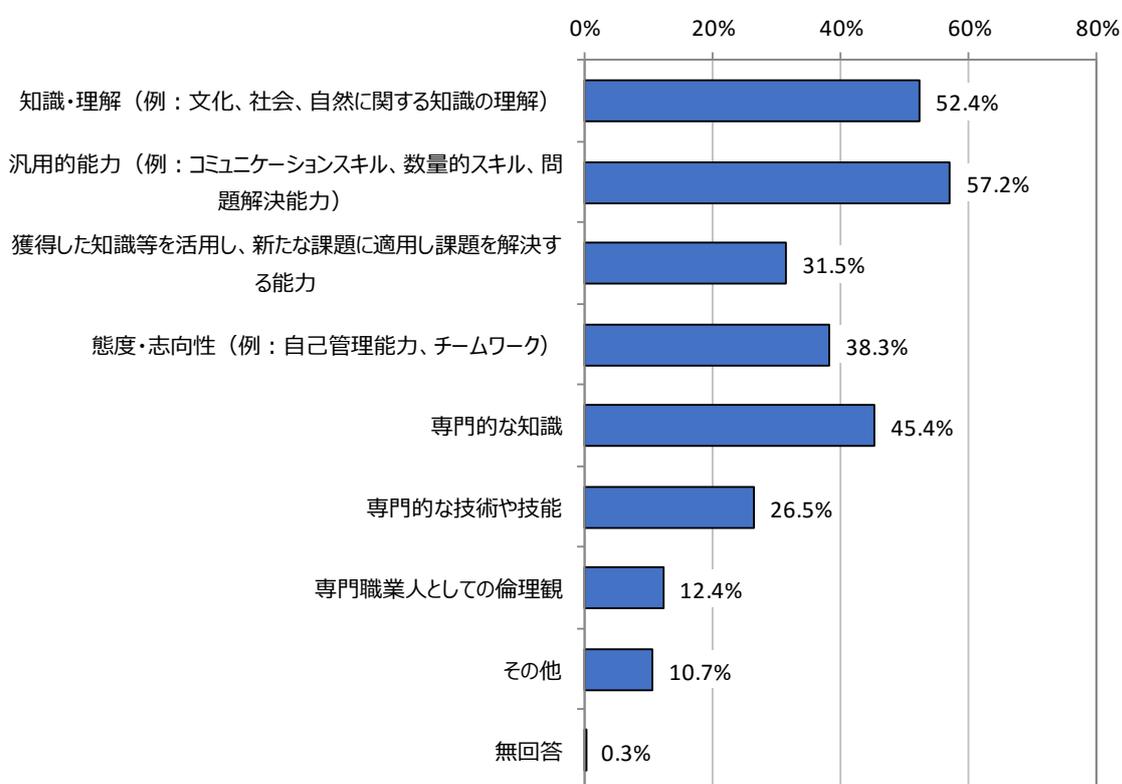
なお、⑥その他のみの回答（n=10）については、次頁以降における三分類別のクロス集計分析からは除外している。

## 2-3 アセスメント・テストの導入状況

### 2-3-1 アセスメント・テストで測定している能力項目

アセスメント・テストで測定している能力項目をみると、「汎用的能力（57.2%）」「知識・理解（52.4%）」の割合が5割を超えて高い。次いで、「専門的な知識」が45.4%となっている。

図表 2-2 アセスメント・テストで測定している能力項目  
(n=355：複数回答)

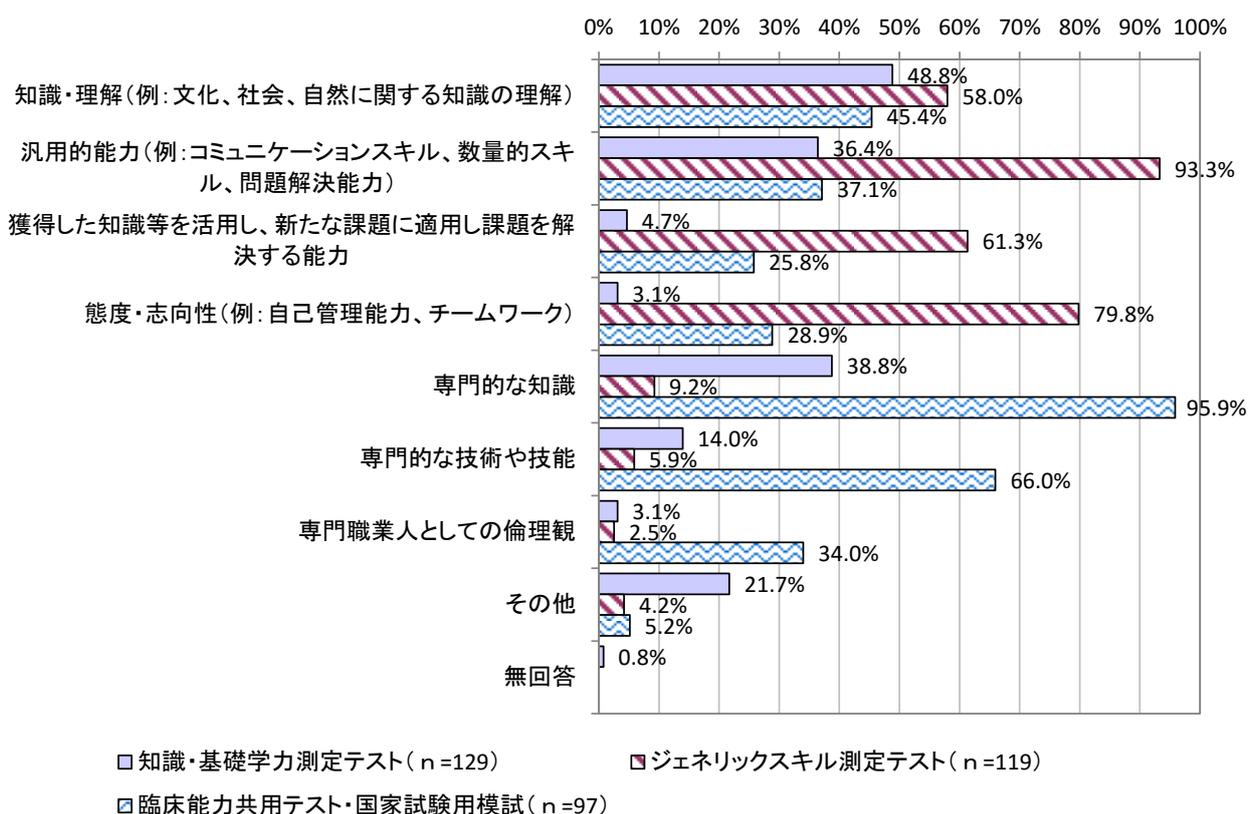


アセスメント・テストの分類別に測定している能力項目をみると、知識・基礎学力測定テストでは、「知識・理解（48.8%）」「専門的な知識（38.8%）」「汎用的能力（36.4%）」の割合が高い。

ジェネリックスキル測定テストでは、「汎用的能力（93.3%）」「態度・志向性（79.8%）」「獲得した知識等を活用し、新たな課題に適用し課題を解決する能力（61.3%）」の割合が高い。

臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、「専門的な知識（95.9%）」「専門的な技術や技能（66.0%）」の割合が高い。

図表 2-3 アセスメント・テストで測定している能力項目（複数回答）



※アセスメント・テストの種類について、「その他」のみの回答（n=10）については分析からは除外している。

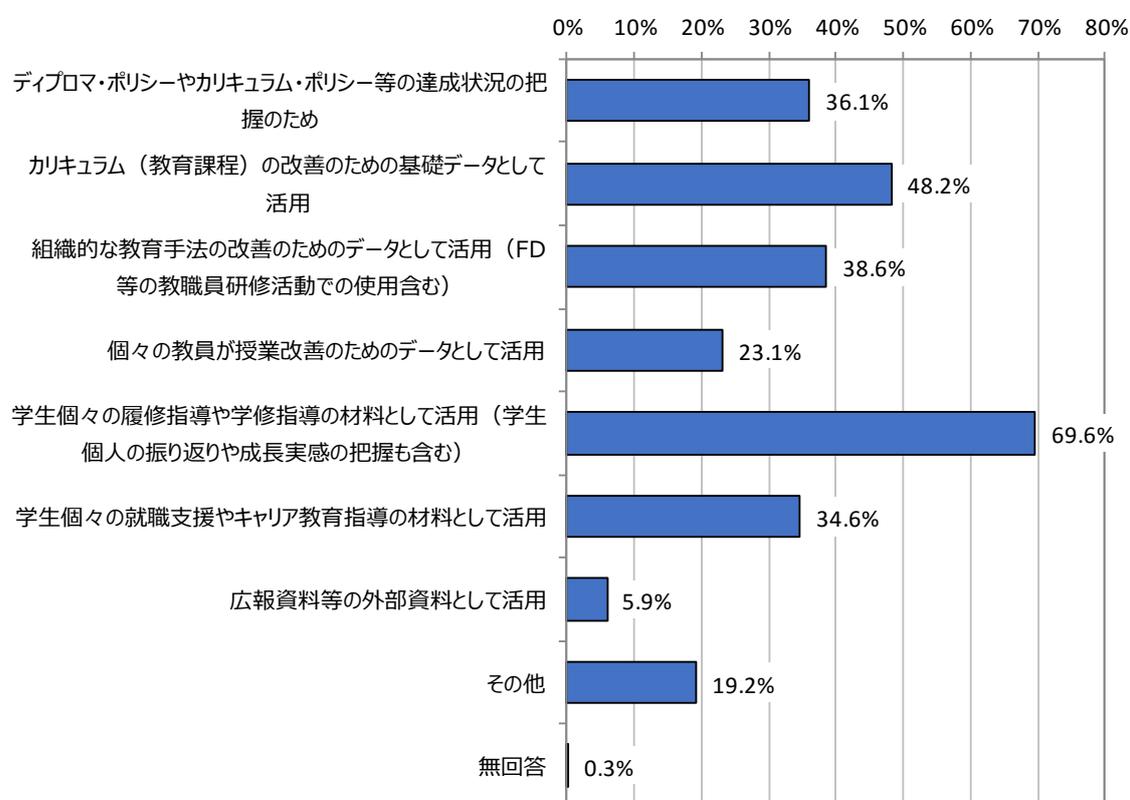
以下同様。

### 2-3-2 アセスメント・テストの導入目的

アセスメント・テストの導入目的は、「学生個々の履修指導や学修指導の材料として活用」の割合が約7割と最も高い。次いで、「カリキュラム（教育課程）の改善のための基礎データとして活用（48.2%）」の割合が高い。

図表 2-4 アセスメント・テストの導入目的

(n=355：複数回答)

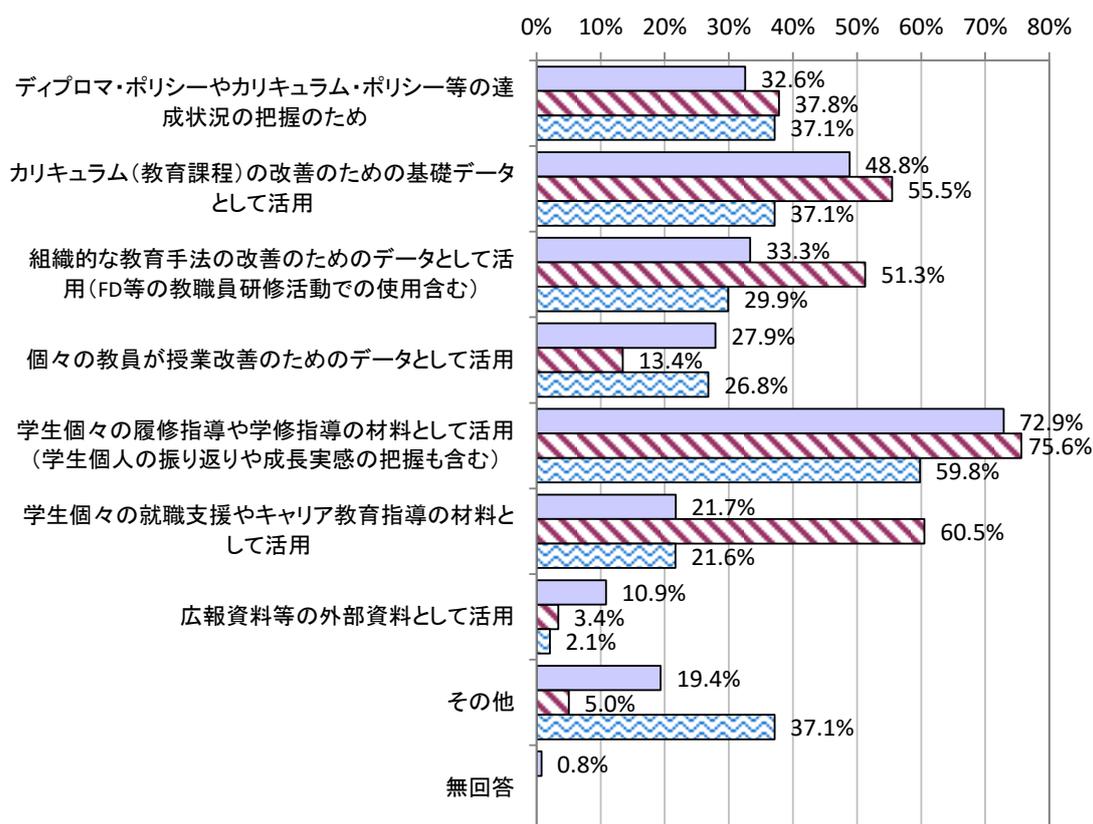


アセスメント・テストの分類別にアセスメント・テストの導入目的をみると、いずれのテストでも「学生個々の履修指導や学修指導の材料として活用」の割合が最も高い。また、「カリキュラム（教育課程）の改善のための基礎データとして活用」についても、知識・基礎学力測定テスト、ジェネリックスキル測定テストでは半数程度が活用している。

ジェネリックスキル測定テストでは、この他に「学生個々の就職支援やキャリア教育指導の材料として活用（60.5%）」「組織的な教育手法の改善のためのデータとして活用（51.3%）」の割合が高い。

臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、「その他」として「臨床実習を開始する前の評価」と「試験にむけた総合的な勉強成果の把握」といった回答が多くみられる。

図表 2-5 アセスメント・テストの導入目的（複数回答）



- 知識・基礎学力測定テスト (n=129)
- ジェネリックスキル測定テスト (n=119)
- ▨ 臨床能力共用テスト・国家試験用模試 (n=97)

### 2-3-3 アセスメント・テストを導入するきっかけ・背景

自由記述にて、アセスメント・テストを導入するきっかけ・背景についてきた。

#### (1)知識・基礎学力測定テスト

知識・基礎学力測定テストの導入のきっかけ・背景については、「学生個人の知識定着の状況を客観的に測定し、教育に役立てる」といった理由が多くみられた。また、「学力に合わせたクラスの編成」という理由も多かった。

分類	回答例(主なもの)
学生個人の知識定着の状況を客観的に測定し、教育に役立てる	公務員試験、行政書士試験の結果が非常に芳しくなかったために、学生の学修到達度を客観的に把握する必要があると認識した。
	英語教育プログラムを改善するために学生の英語力を測定し、英語力の向上に役立てるために実施した。学生自身が TOEIC を受検することで各自の英語力を知り、大学4年間で授業や授業以外で自律的に学習できるようにさせる。
	本学の学生の英語力がどれ程かを把握するため。TOEIC はコスト的に学生負担が少ないこと、また、試験も比較的に実施し易く、スコアのスケール幅もあり伸びが分かりやすいという特徴があったため。
	学生がこれまで学んできた心理学の学習成果を自らで計ることを目的とし、心理学検定試験の受検を学生に促した。さらに学生全体で学習成果と学習効果を検証できるように3年生を全員受検させるようになった。
学力に合わせたクラスの編成	TOEIC の結果を2年次のクラス分けの placement test として利用している。
	1年生の前期に「基礎ゼミ」(4~6人の学生を1人の教員が担当し、学生に主体性を持たせたグループワークを実施)において、学生間に基礎学力の差が大きい場合、授業運営が困難になることが問題となった。そこで基礎学力を把握し、学生配置調整するために導入した。
	英語の授業を能力別クラス編成で行うため
	ある一定の英語力を備えて大学に入学してくるが、英語の能力に差があり、習熟度・能力別のクラス編成とするためにテストを導入

## (2)ジェネリックスキル測定テスト

ジェネリックスキル測定テストでは、「学修成果の可視化（教育改革の評価のため）」「学生個人の知識定着の状況を客観的に測定し、教育に役立てる」「教育方針やカリキュラムの策定・改善に活用」という理由が多かった。「学生個人の知識定着の状況を客観的に測定し、教育に役立てる」という理由については、就職指導を理由として実施しているケースも多い。

この他、文部科学省等の競争的資金の獲得を契機に導入したという回答もみられた。

分類	主な理由(主なもの)
学修成果の可視化(教育改革の評価のため)	教育の質的転換答申を受けて、学修成果の把握が不可欠の課題となっている。そこで、主に社会人基礎力の伸長を把握するためにアセスメント・テスト導入を行った。
	大学改革・教育改善における進捗評価のための客観的指標の必要性の認識が高まったため。
	全学的な「卒業時質保証のための教学マネジメントシステム」の構築を図ることを決定し、そのうちの一部である「学修成果の測定および可視化」を目的に同テストを導入することとした。
	学修成果の可視化、教育の質保証が今後の教学運営の重要事項であり、併せて3ポリシー見直し必須の状況となっていた。測定可能な教育目標の設定のために、学生のリテラシーとコンピテンシーを測るアセスメント・テストの導入が決定された。
	平成28年度の学部学科再編において実践的な教育へと移行した。その中で外部の標準化されたテスト等による学習成果の把握を行っている。
学生個人の知識定着の状況を客観的に測定し、教育に役立てる	学生に2年間の学びの中で社会人にどこまで近づいたかを確認させ、今後の2年間の学びへの展望を与え、具体的学習行動に結び付けさせる。
	きめ細かな学生指導とキャリア形成支援の充実を図るため、アセスメント結果をチューターと学生の個人面談に活用したいと考えたため。
	「厳選採用」という厳しい就職環境を受けての低学年に対する就職指導の必要性の高まりをうけて導入した。
	学生が将来どのような職業に就こうとも必要とされるジェネリック・スキル(社会人基礎力)を測定し、将来の職業を検討していく際の自分自身の強みや弱みの把握を自ら考えるツールとして活用する。

分類	主な理由(主なもの)
教育方針の 策定・カリキ ュラムの点 検等	<p>本学での教育活動の展望を検討するうえで、競合校との差異を確認し、全国規模における位置付けを見直す必要があり、教員が学生の実態を正確に理解することがその足掛かりとなると考え、アセスメント・テストを導入した。</p>
	<p>教育改革を進める中で、シラバスに能力指標として挙げている項目とその内容の妥当性を検証するため、学習成果の測定が必要になった。</p>
	<p>元々行っていた基礎ゼミナールのアンケートを実施していたが、他大学と相对比较を行うために導入した。</p>
	<p>教育効果の抜け漏れや重複の有無の検証を目的として導入した。</p>
	<p>学生のジェネリックスキルとリテラシー能力の養成が大学の課題として挙げられており、これらの能力を養成する仕組みを組織的に構築するための基礎データの材料として導入。</p>
	<p>文部科学省事業「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に採択され、学生が就業力をどのくらい保有しているか、またどこに課題があるのかを調査するため、「就業力アセスメント」としてテストを実施した。</p>
<p>社会人基礎力や学士力など大学教育（学修）の成果を対象に組み込んだ教育改革への社会的要求が顕在化しているなかで、本学では社会人基礎力その他の伸長が期待できる教育プログラムを実施していながら、当時はその成果を評価する指標を保有していなかった。</p>	

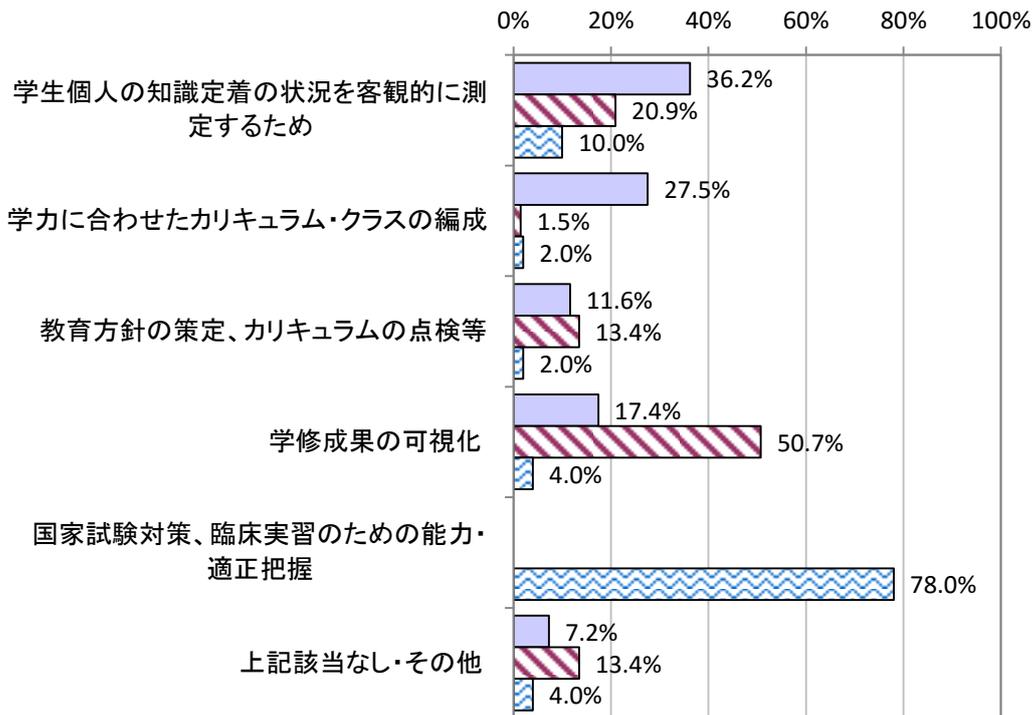
### (3)臨床能力共用テスト・国家試験用模試

臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、「国家試験対策」「臨床実習のための能力・適性把握」という理由が、ほとんどであった。

分類	主な理由
国家試験対策、臨床実習のための能力・適性把握	医学部の学生の能力と適性についての一定水準を確保するために実施する全国共通の標準評価試験が導入された。
	管理栄養士国家試験対策を主たる目的として導入。
	臨床実習の充実を目指して医学系・歯学系の大学・学部等が自主的に参加する、全国共通の標準評価試験が開始されたことを受けて実施した。
	実務実習に参加するための能力（資格）を担保するため。
	看護師国家試験、保健師国家試験の合格率を上昇させるための対策として導入。
	国家試験の合格に向けて、全国レベルでどの位置にいるのかを知ることや、国家試験にある各科目の得意不得意を知るようにする。
	共用試験 CBT, OSCE：臨床実習開始前の学生の適性と能力を全国的に一定水準のレベルに確保するため。
	学修の到達目標の大きな柱である「国家資格取得」が必然であったため、その国家試験対策がアセスメントにつながっている。
	臨床実習開始までに修得しておくべき必要不可欠な歯学的知識を総合的に理解しているかを評価するため
	全国統一の「臨床実習開始前の共用試験（CBT および OSCE）」が、医学部・歯学部において導入され、本学も参加することとなった。
CBT 模擬試験：薬学共用試験受検前の学力把握のため 全国統一模擬試験：薬剤師国家試験受検前の学力把握のため	

参考までに、自由記述の結果を分類してグラフ化した結果は、下記のとおりである。

図表 2-6 アセスメント・テストを導入するきっかけ・背景  
(自由記述の分類。回答のあったもののみ)



- 知識・基礎学力測定テスト(n=69)
- ジェネリックスキル測定テスト(n=67)
- 臨床能力共用テスト・国家試験用模試(n=50)

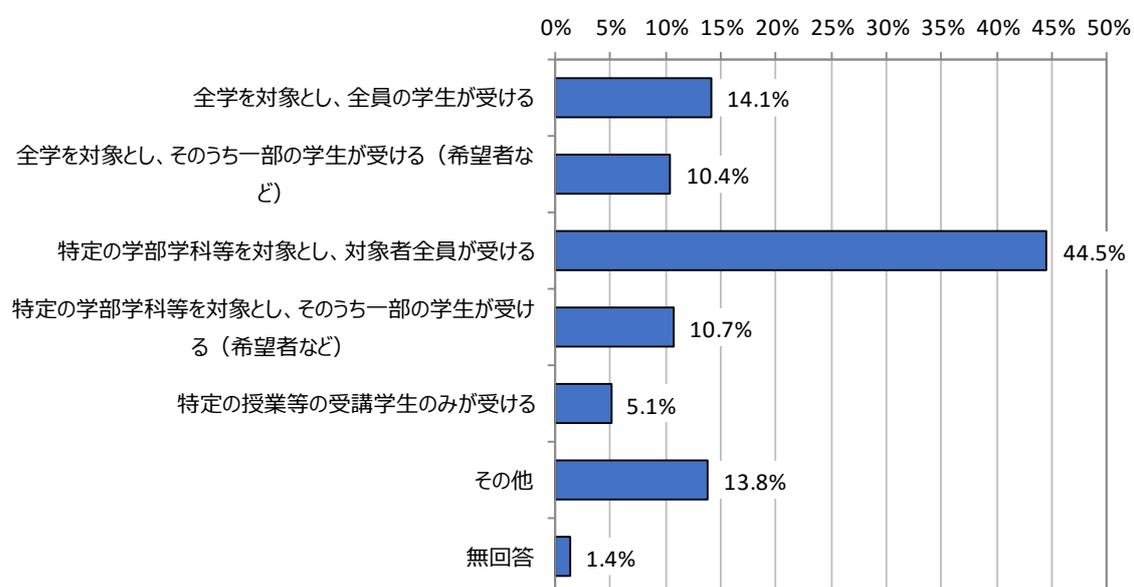
## 2-4 平成28年度のアセスメント・テストの活用実態

### 2-4-1 アセスメント・テストを受ける学生の範囲

アセスメント・テストを受ける学生の範囲をみると、「特定の学部学科等を対象とし、対象者全員が受ける」の割合が44.5%と最も高い。

図表 2-7 アセスメント・テストを受ける学生の範囲

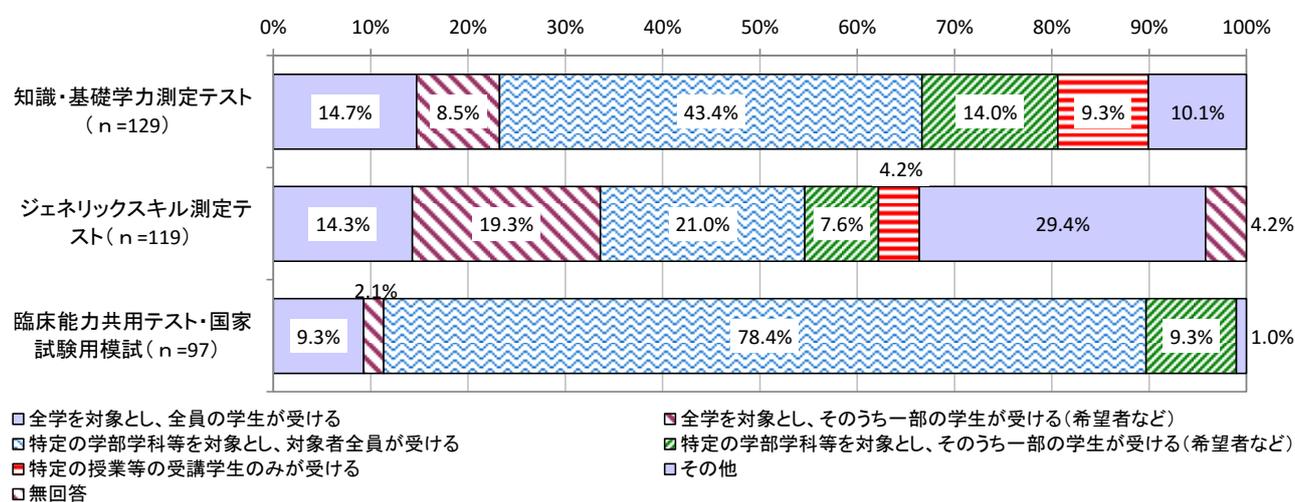
(n=355：複数回答)



アセスメント・テストの分類別にアセスメント・テストを受ける学生の範囲をみると、知識・基礎学力測定テストと臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、「特定の学部学科等を対象とし、対象者全員が受ける」の割合が高い。当該学部学科で求められる知識能力等の獲得についての達成度を測るために活用されていることがわかる。

一方で、ジェネリックスキル測定テストは、テストを受ける学生の範囲は、大学・学部等によって様々である。

図表 2-8 アセスメント・テストを受ける学生の範囲（複数回答）

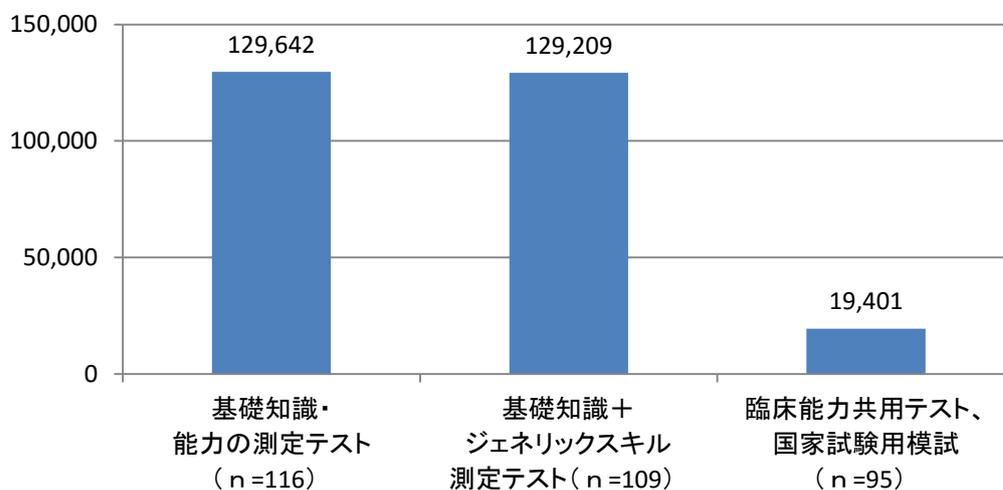


## 2-4-2 アセスメント・テストの実施規模

平成28年度にアセスメント・テストを受けた学生の合計回答人数をみると、知識・基礎学力測定テストと、ジェネリックスキル測定テストでは、それぞれ12万9千人程度となっている。

臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、2万人弱となっている。

図表 2-9 平成28年度にアセスメント・テストを受けた学生の合計人数（人）  
（全回答計）

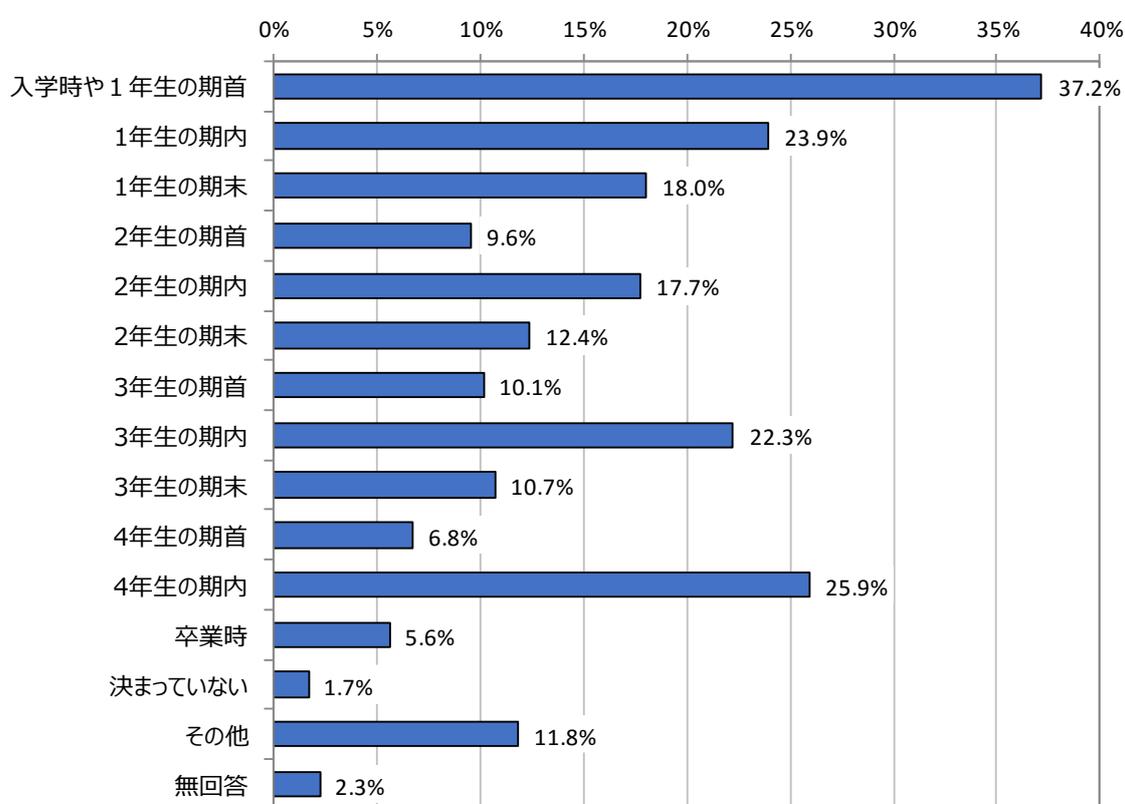


### 2-4-3 学生がアセスメント・テストを受ける時期

学生がアセスメント・テストを受ける時期についてみると、「入学時や1年生の期首(37.2%)」の割合が最も高い。次いで、「4年生の期内(25.9%)」、「1年生の期内(23.9%)」、「3年生の期内(22.3%)」の順となっている。

図表 2-10 学生がアセスメント・テストを受ける時期

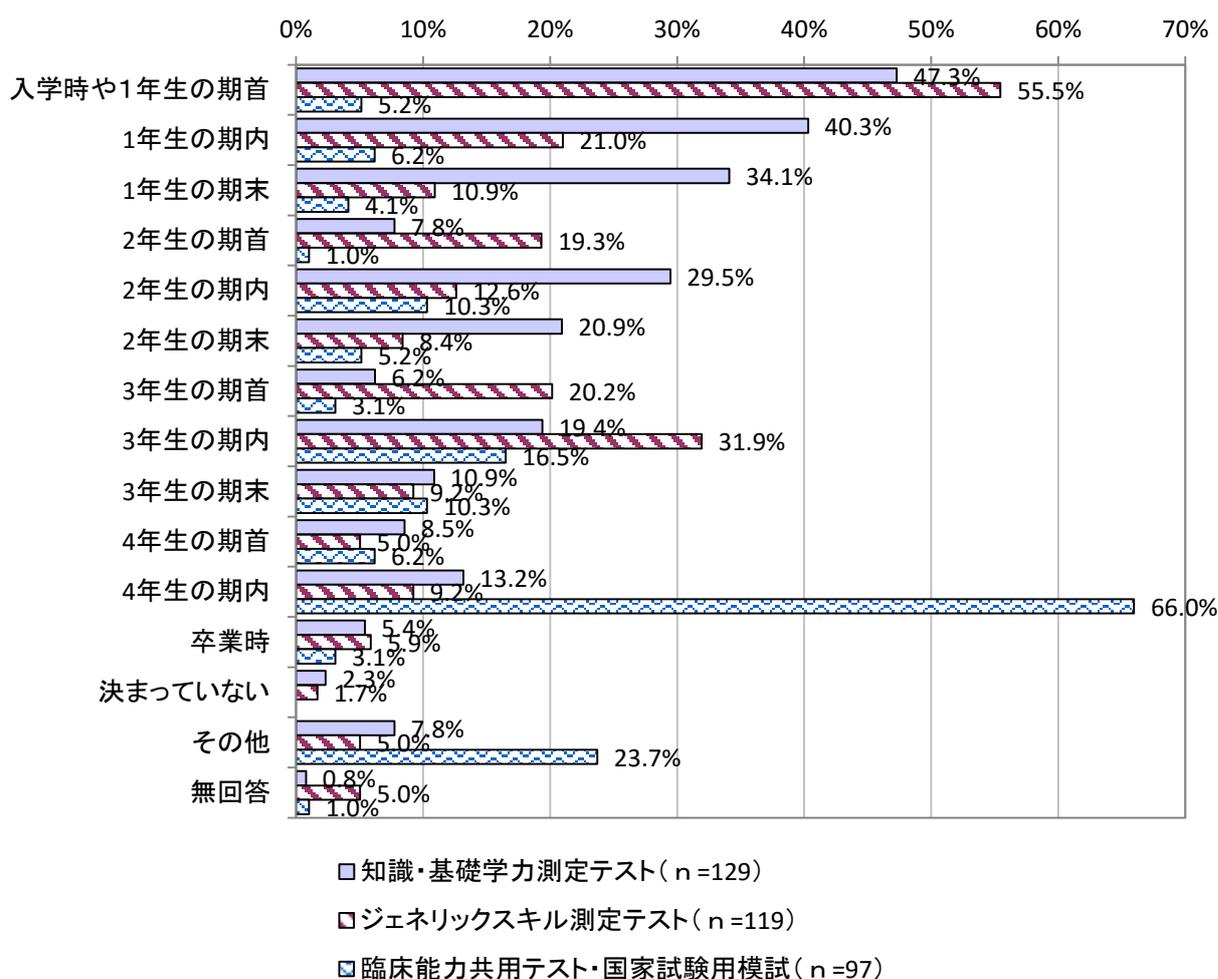
(n=355 : 複数回答)



アセスメント・テストの分類別に学生がアセスメント・テストを受ける時期をみると、知識・基礎学力測定テストと、ジェネリックスキル測定テストでは、「入学時や1年生の期首」の割合が半数程度と最も高い。知識・基礎学力測定テストでは、次いで「1年生の期首」「1年生の期末」「2年生の期首」の割合が高い。一方で、ジェネリックスキル測定テストでは、次いで「3年生の期首」の割合が高い。知識・基礎学力測定テストでは、1,2年次の知識等の獲得の達成度（あるいは入学時から2年生までの知識の成長度）を測るために活用されていることがわかる。ジェネリックスキル測定テストでは、入学当初から3年次までの知識・能力の成長度を測るために活用されていることがわかる。

臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、「4年生の期首」あるいは、5、6年生（「その他」の回答）時に受ける割合が高い。

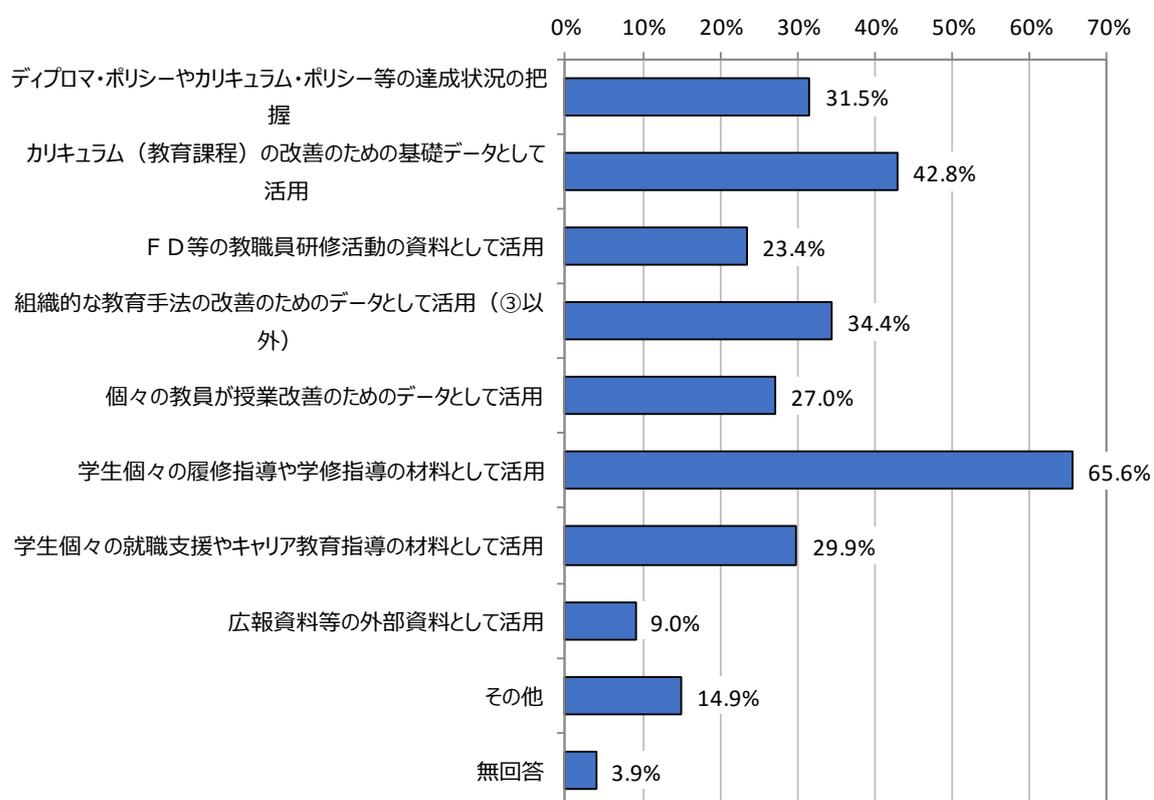
図表 2-11 学生がアセスメント・テストを受ける時期（複数回答）



#### 2-4-4 アセスメント・テスト結果の活用で役立つ内容

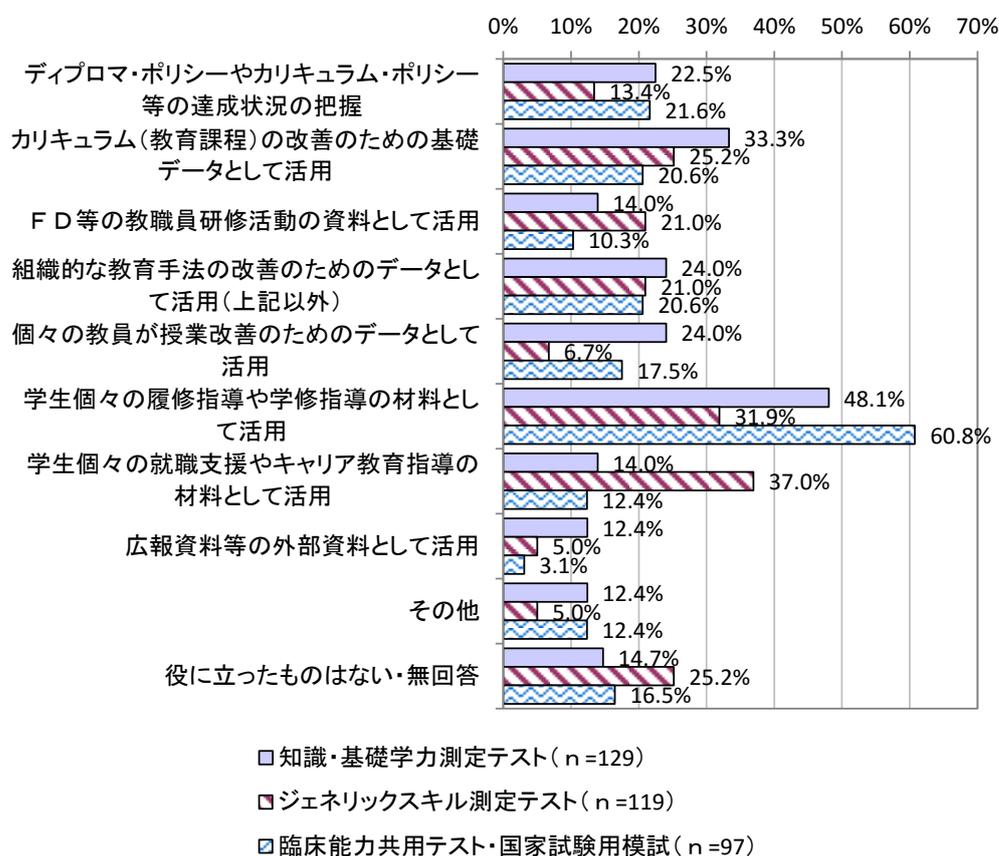
アセスメント・テスト結果の活用で役立つ内容は、「学生個々の履修指導や学修指導の材料として活用」の割合が6割を超えて最も高い。次いで、「カリキュラム（教育課程）の改善のための基礎データとして活用」が4割を超えている。

図表 2-12 アセスメント・テスト結果の活用方法のうち役立つもの  
(n=355：複数回答)



アセスメント・テストの分類別にアセスメント・テスト結果の活用で役立った内容をみると、知識・基礎学力測定テストと臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、「学生個々の履修指導や学修指導の材料として活用」の割合が高く、ジェネリックスキル測定テストでは、「学生個々の就職支援やキャリア教育指導の材料として活用」と「学生個々の履修指導や学修指導の材料として活用」が同程度で高い。また、知識・基礎学力測定テストでは、「カリキュラム（教育課程）の改善のための基礎データとして活用」も3割強と割合が高い。

図表 2-13 アセスメント・テスト結果の活用方法のうち役立ったもの（複数回答）



## 2-4-5 アセスメント・テストの具体的な活用方法や実施しての効果

アセスメント・テストの具体的な活用方法や実施しての効果について自由記述できいたところ、下記のような回答が得られた。

### (1)知識・基礎学力測定テスト

知識・基礎学力測定テストでは、「クラス分けの指針」と「学生への指導の材料として活用」「教育手法の改善」といった形で組み合わせて活用する回答が多くみられた。この他、「学生のモチベーション向上」のための活用や効果があった、といった回答もいくつかみられた。

分類	活用方法、実施効果（主なもの）
クラス分け	TOEIC のスコアに応じて、翌年度の英語科目の習熟度別クラスを決定している。
	クラス分けやキャリア教育指導のための客観的なデータとして使用できる。
	必修の英語科目における習熟度別のクラス分けに使用している。入学前に行う Placement Test にて1年春期のクラスを決定し、1年秋期の Achievement Test にて2年次の英語クラスを決定する。学生の実力に合ったクラスにて授業を受けることにより適切な成長を促せるようになっている。
	日本語検定は、キャリア拡充（資格取得）コースのスクリーニングとしても活用されているので、資格取得を目指す学生が強い目的意識を持って受検している。それがコース生の基礎的能力の向上につながっている。
	12月に1～3年生全員を対象に実施する TOEIC Listening & Reading Test の結果により、翌年度のクラス分け、グループ分けを行っており、授業運営がしやすくなっている。
学生への指導の材料として活用	アセスメント・テストの結果を参考に、TAをつけリメディアル教育を行う。
	TOEFL については、年間2回実施し、その得点の推移を測定することで成長度を把握している。
教育手法の改善	新学実力テストについては、各学年における正答率の上位と下位の設問や、識別指数マイナスの設問を抽出することで、設問レベルでの分析・評価を行っている。
	アセスメント・テストの分析結果を対象科目の教職員に共有し、翌年度以降の科目配当の参考とするなどカリキュラム改善に活用している。

分類	活用方法、実施効果（主なもの）
	<p>実施する科目の成績に 10%~20%の割合で成績に入れる基準を作成し、担当教員全員で共有している。これにより、習熟度別クラスにおける評価方針の統一化への一助となった。</p>
<p>学生のモチベーション向上</p>	<p>基礎的資格取得目標として、経営学部生全員に実施し、さらに上を目指せるよう動機付けし、3年後の就職活動で、自分の目指す進路を実現できるようバックアップしている。</p>
	<p>TOEIC Program DATA &amp; ANALYSIS をみると、語学・文学系（英語専攻）の大学生が1～4年次の間におよそ120点ほどスコアを伸ばしていることが分かります。伸びは200点前後あるので、それを激励の材料に使っています。</p>
	<p>語彙・読解力検定の受検結果は、就職活動においても利用できるもので、学生が積極的に受検し、1年次（前期中）の受検にも拘わらず2級を取得した学生が3割を超えた。学生の学修に対するモチベーション向上に影響を与えている。</p>
	<p>心理学検定試験は複数科目の合格で級の取得となり、積み上げ式を採用しているため、1年生から受検する学生もあり、意欲的な学生が増加傾向にある。専門科目をある程度学んでいる3年生で全員受検とするため学生の学習効果の検証に役立つ。自主学習の時間が増加傾向にある。</p>
	<p>定期的な TOEIC 受検により、学生が自分の英語力を知り、英語学習に対する動機づけの向上がみられた。また、指定した時期以外にも継続的に受検する学生が増えた。</p>
	<p>長期にわたって徐々に向上する傾向のある語学においては、定点観測し、学生にフィードバックすることで、学習意欲向上が期待でき、また教員の授業運営も毎年点検を受けることで、緊張感が生まれる。</p>

## (2)ジェネリックスキル測定テスト

ジェネリックスキル測定テストでは、「学修成果の可視化、学修成果の検証・分析」や「学生への指導の材料として活用」という理由が多くみられた。また、知識・基礎学力測定テストと同じく「教育手法の改善」という回答もいくつかみられた。

分類	活用方法、実施効果（主なもの）
学修成果の可視化、学修成果の検証・分析	測定したデータを基礎として、学科ごとの IR レポートを作成し、これまで印象で把握していた学科ごとの特徴を可視化することができた。加えて面談等を通じ、4年間の学習目標を示すとともに、学生の自己理解の一助となった。
	学生の能力伸長を図ることができる。また、学生の成長を定性的に評価することができる。
	副専攻や地域課外活動の取り組みの「有無」をグルーピングすることで、属性グループごとの差異が生じうるのかを検証している。
	例年、IR 部門と教育改善部門が協力し、GPA や入試経路、出身高校種別などの属性データ、学生行動調査の指標などを合わせて、学生の傾向などもみている。経年受検者の結果との比較などを行い、状況把握に役立っている。
	学年進行に伴う学力(単位)の積み重ねの可視化
	新生生のうち 8 割が受講する初年次キャリア教育科目（1 年生前期開講）において、受講者全員に測定テストを受けさせ、入学時点での汎用的能力を測定するとともに、その後の大学生活での活用や主体的な学修を通じた成長の可視化について、学生自身に意識づけをはかっている。
	アクティブ・ラーニングプログラムに参加した学生のコンピテンシーの伸び率を定量的に計測することで、アクティブ・ラーニングプログラムの有用性について検証した。
学生への指導の材料として活用	ゼミ指導教員に結果を渡し、学修指導、キャリア教育に活用する。学生との個人面談を実施し、学生個々の理解を深めるために役立っている。
	学生本人と就職課とで結果が共有されることで、学生は今後の大学生活や進路選択の参考にする。
	測定された「リテラシー」と「コンピテンシー」の能力を高めるためにゼミナール担

分類	活用方法、実施効果（主なもの）
	<p>当教員が学生と面談を行い、目標を設定する。目標を達成するために学生は教員に相談をし、教員は学生に指導をする。</p> <p>社会が求める力とそのレベルに対する、自分の現在の立ち位置を確認できるという意味において、キャリア形成支援の一環として活用している。</p> <p>クラスアドバイザーと学生の面談時に使用した。特に3年生に対しては、自分自身の強みや弱みを知ることができ、今後の社会人基礎力強化に繋がるきっかけとなった。</p> <p>経年データを比較し学生の特徴を掴む。足りない部分を補う指導を実施する。</p> <p>各学生のテスト結果（変化、全体との比較を含む）を毎回PDFの形にして、全学生に電子的に配布（個人ポートフォリオに保存）している。学生はいつでもテスト結果を閲覧でき、過去との比較も可能にして、反省・気づきを以降の学業、就職活動等に活かしている。</p>
教育手法の改善	<p>学科ごとにFD研修会を開催し、集計データから、学科ごとに何が不足しているのか、今後どのように教育を展開するのか等について、フィードバックをしている。特に汎用的能力の育成については、これまで教育目標として明示されておらず、専門領域によっては、重要視されてこなかった側面があったが、ディプロマ・ポリシーに位置付けたこと、それをアセスメント・テストにより可視化したことにより、教員が汎用的能力をどのように育成していくべきか検討する機会となっている。テストの結果を反映し、カリキュラム改革が行われており、また、教員毎に教授法を工夫する等、既に変化が生まれつつある。</p> <p>結果は各学部長に報告され、学部運営の一資料として活用。事務局でも就職支援行事の企画時の参考として活用。</p> <p>就業力アセスメントと学生の意識・行動調査をクロス分析することで、就業力が伸びる学生と伸び悩む学生に二極化傾向がみられることがわかった。今後、両者の特徴を分析することで、教育改善に結び付けられると期待している。</p> <p>教職員対象に報告会を開催し、全体傾向とともに学部毎の特徴や他大学との比較等を踏まえて、本学学生の汎用的技能（ジェネリック・スキル）の状況と今後の教育課題を検討。また、受検学生を対象に、個々人の結果解説やスキルアップ等の指導・助言を含んだ解説会を実施し、モチベーションアップを図る。</p>

### (3)臨床能力共用テスト・国家試験用模試

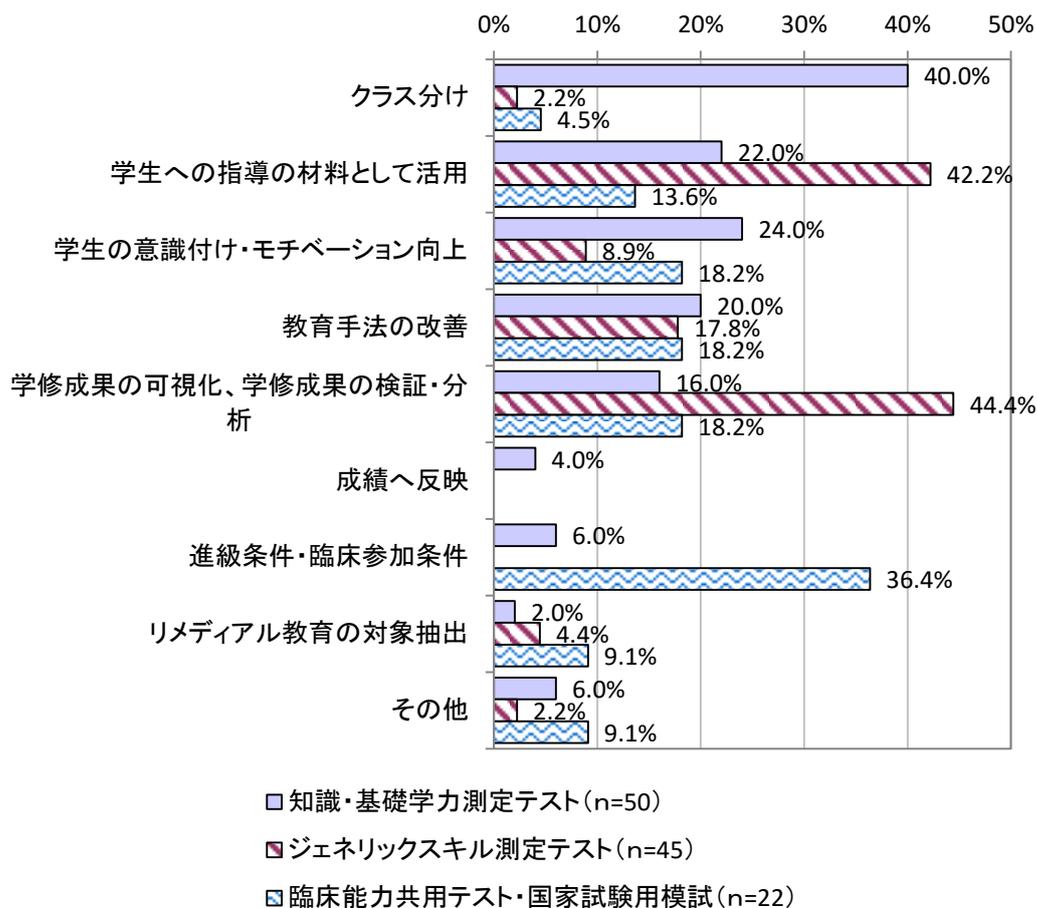
臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、「進級条件、臨床参加条件」として活用されているケースが多い。

分類	活用方法、実施効果（主なもの）
進級条件・臨床参加条件	「栄養士実力認定試験」のA判定を卒業要件としている。それ以外の場合は、他の卒業試験の成績を加味して卒業判定を行っている。
	OSCEは全国共通の標準評価試験であり、CBTとOSCEの両方に合格しないと5-6年生での臨床実習に参加する資格を得ることができない。両テストの合格により、チューデント・ドクターとして臨床実習を行うための知識、技能、態度が備わっていることが保証される。
	進級要件となっている。全国医学部長病院長会議によるStudent Doctor認証の要件となっている。
	4年次の演習に続くOSCEでは、本来、学生全員が実習で体験することが望ましい事例を展開するため、未経験の学生にとっては、学習の機会提供になり、学生の満足度も高くなった。
	参加型臨床実習を行うにあたり、獣医学共用試験（vetCBT, vetOSCE）を実施し、実習に臨む学生に必要な最小限の知識・技能・態度の到達レベルを公平かつ厳正に評価し、その質を動物所有者（飼育者）と社会に保証している。
	設定した合格基準に達することがその後の臨床実習実施の要件になっている。また、各個人の学習到達度及び学習指導に用いている。
	学生の臨床実習着手判定に用いる。

参考までに、自由記述の結果を分類してグラフ化した結果は、下記のとおりである。

図表 2-14 アセスメント・テストの具体的な活用方法や実施しての効果

(複数回答：自由記述の分類。回答のあったもののみ)



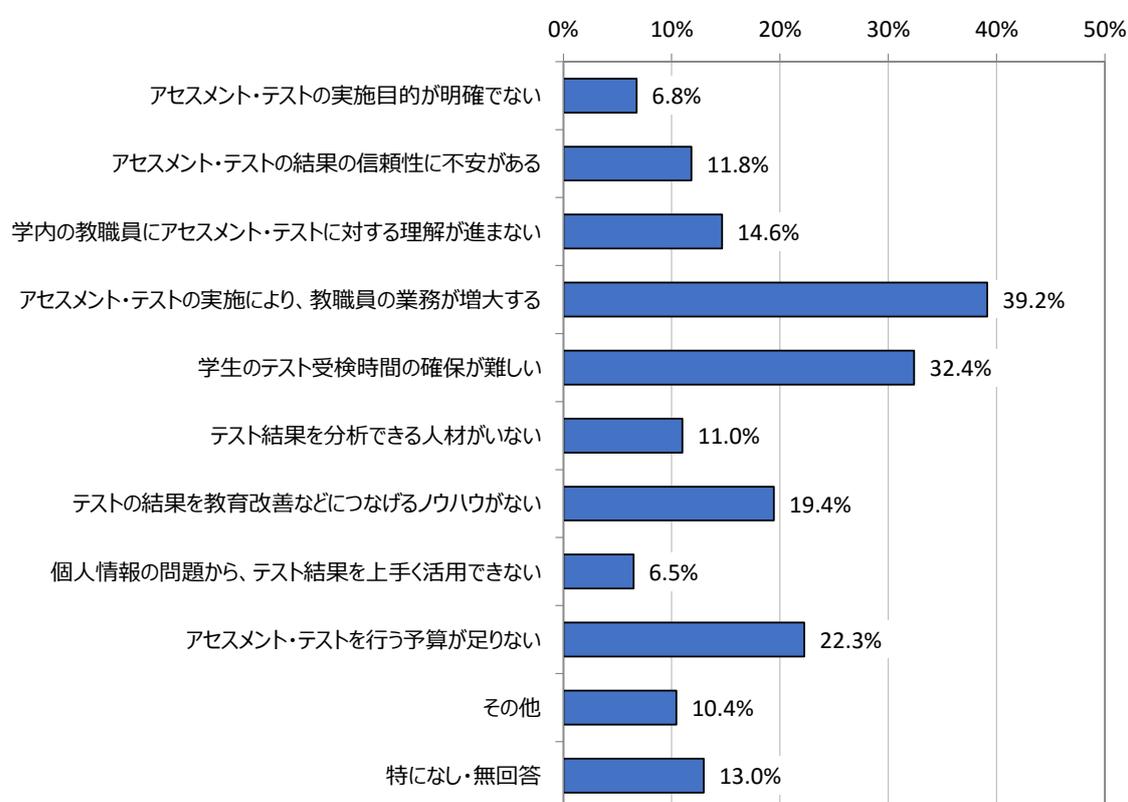
## 2-5 アセスメント・テストの実施上の課題・工夫点

### 2-5-1 アセスメント・テストの実施上の課題

アセスメント・テストの実施上の課題は、「アセスメント・テストの実施により、教職員の業務が増大する」の割合が39.2%と最も高い。次いで、「学生のテスト受検時間の確保が難しい」が32.4%となっている。

図表 2-15 アセスメント・テストの実施上の課題

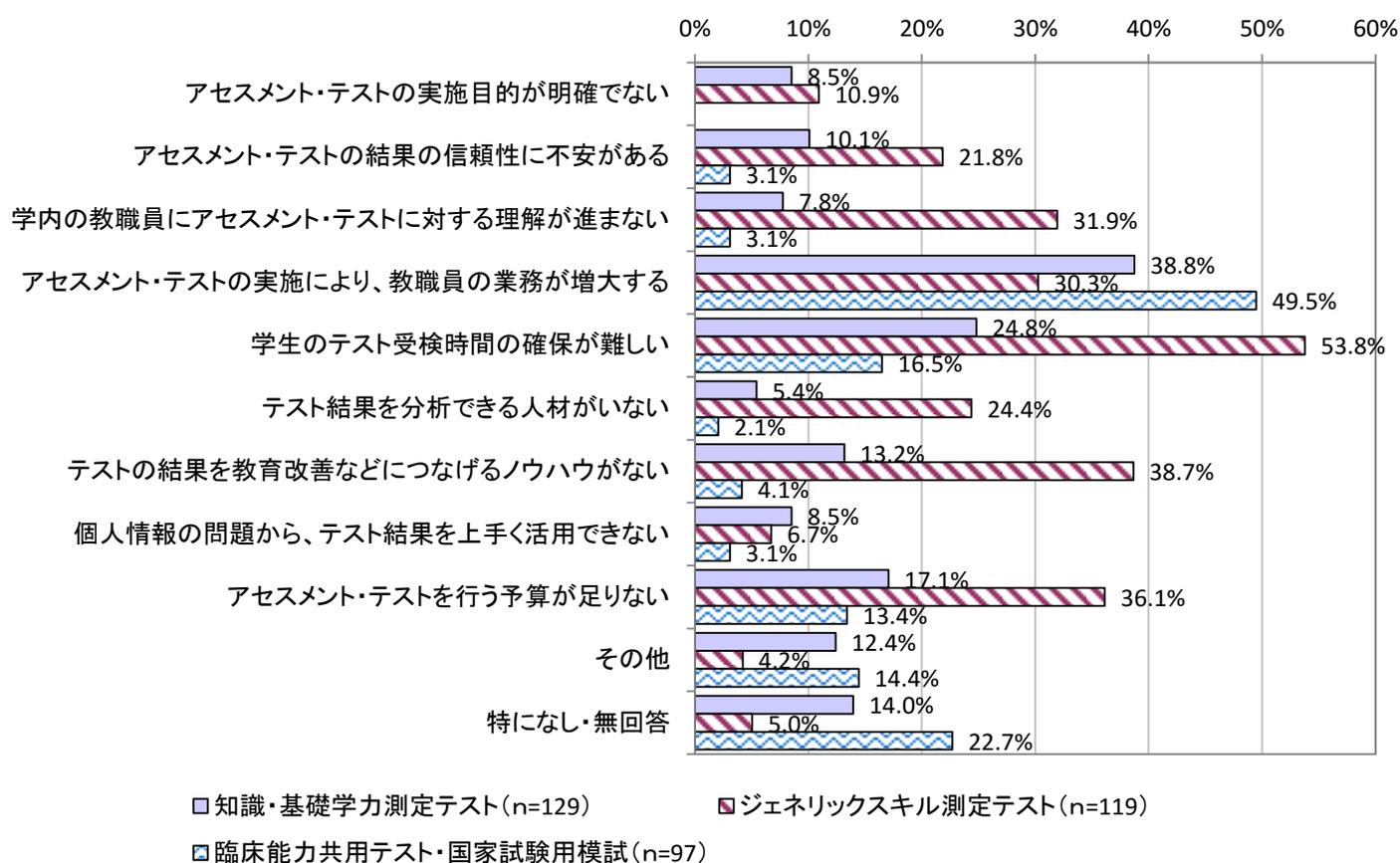
(n=355：複数回答)



アセスメント・テストの分類別にアセスメント・テストの実施上の課題をみると、知識・基礎学力測定テストと臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、「アセスメント・テストの実施により、教職員の業務が増大する」の割合が最も高い。

一方で、ジェネリックスキル測定テストでは、「学生のテスト受検時間の確保が難しい（53.8%）」「テストの結果を教育改善などにつなげるノウハウがない（38.7%）」「アセスメント・テストを行う予算が足りない（36.1%）」「学内の教職員にアセスメント・テストに対する理解が進まない（31.9%）」が課題となっている。

図表 2-16 アセスメント・テストの実施上の課題（複数回答）



## 2-5-2 他データとの紐づけ分析・検証

アセスメント・テスト結果と他データとの紐づけ分析・検証について、約4割が実施「している(42.3%)」と回答している。

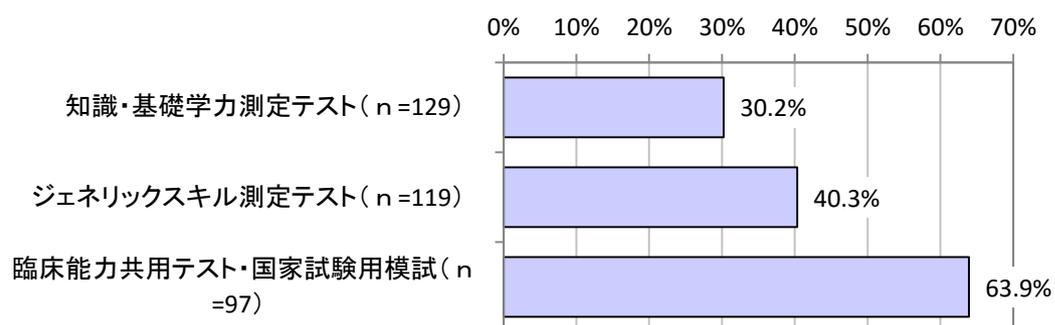
図表 2-17 アセスメント・テスト結果と他データとの紐づけ分析・検証の実施割合  
(n=355)



アセスメント・テストの分類別に他データとの紐づけ分析・検証の実施状況についてみると、臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、6割以上で実施されている。

一方、知識・基礎学力測定テストと、ジェネリックスキル測定テストでは、他データとの紐づけ分析・検証の実施は、3~4割程度に留まっている。

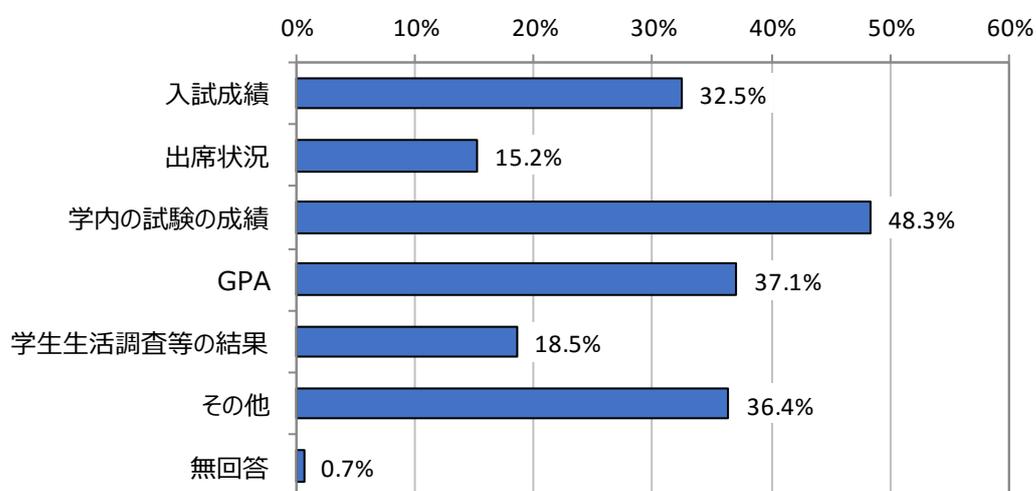
図表 2-18 アセスメント・テスト結果と他データとの紐づけ分析・検証の実施割合



### 2-5-3 アセスメント・テストの結果と紐づけて分析・検証したデータ

アセスメント・テストの結果と紐づけて分析・検証を実施している大学・学部等において紐づけて分析・検証したデータの種類をみると、「学内の試験の成績」の割合が約5割と高い。次いで、「GPA (37.1%)」「入試成績 (32.5%)」が3割を超えている。

図表 2-19 アセスメント・テストの結果と紐づけて分析・検証したデータ  
(n=151：複数回答)

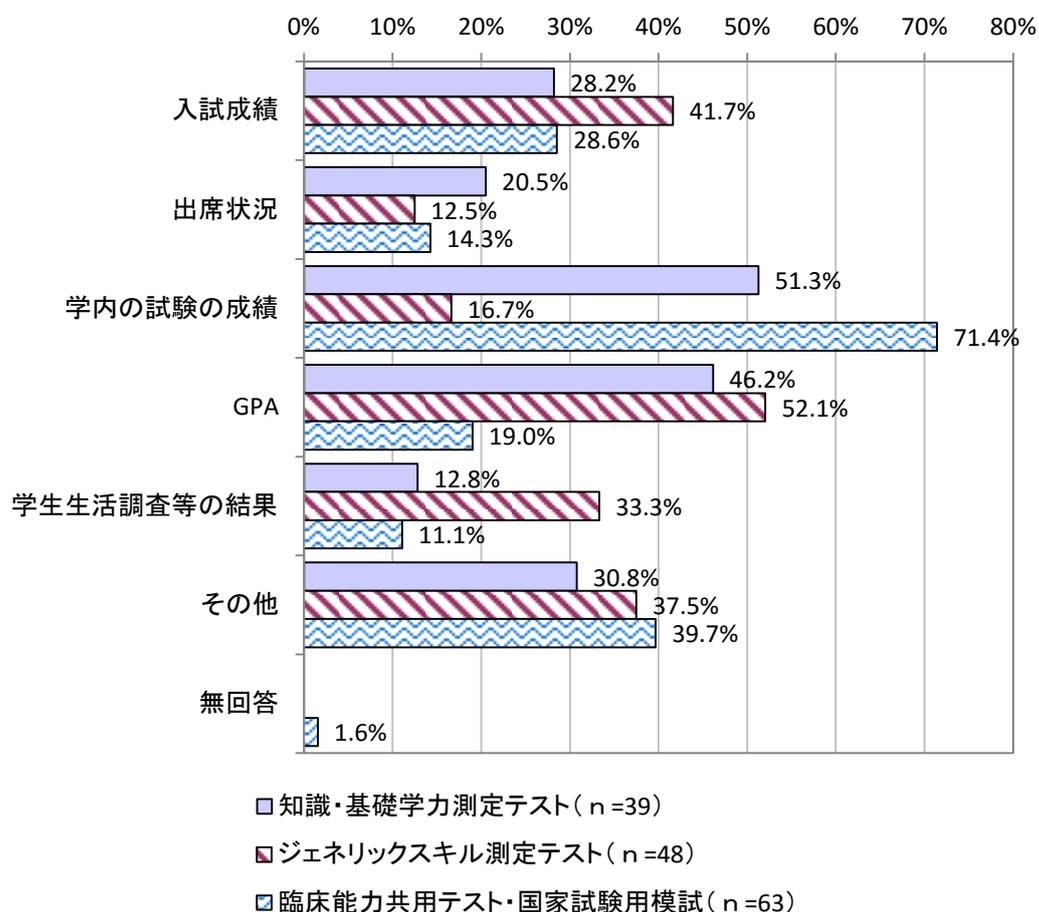


アセスメント・テストの分類別に他データとの紐づけ分析・検証を実施している大学・学部等において、紐づけて分析・検証したデータの種別をみると、臨床能力共用テスト・国家試験用模試では「学内の試験の成績」の割合が高い。また、「その他」の内容として「試験の合格率」等の回答がみられる。

知識・基礎学力測定テストでは、「学内の試験の成績」「GPA」の割合が高い。

ジェネリックスキル測定テストでは、「GPA」「入試成績」「学生生活調査等の結果」等の割合が高い。また、「その他」の内容として、入試形態、就職状況等の回答がみられる。

図表 2-20 アセスメント・テストの結果と紐づけて分析・検証したデータ（複数回答）



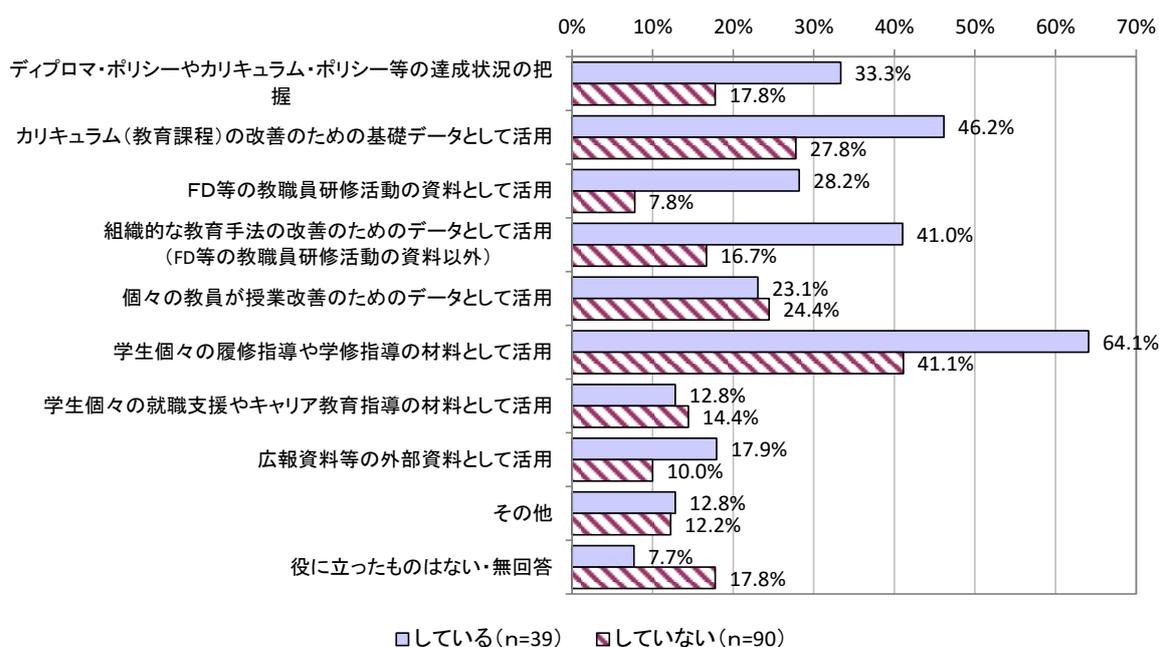
#### 2-5-4 他データとの紐づけ分析・検証と役立ったかどうか

他データとの紐づけ分析・検証の効果について分析を行うために、他データとの紐づけ分析・検証有無別にアセスメント・テスト結果の活用で役立った内容をみる。

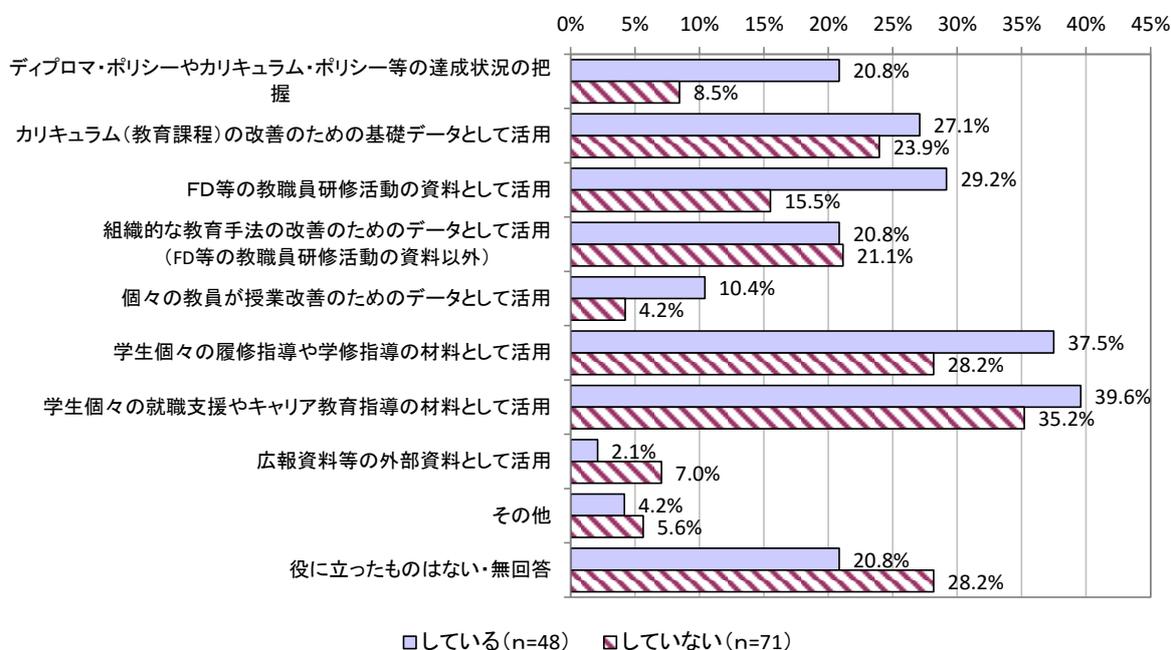
その結果、三分類のいずれのテストでも他データとの紐づけ分析・検証を行っている方が、アセスメント・テスト結果の活用で役立っている割合が高い。

アセスメント・テストは、実施するだけでなく、他データとの紐づけ分析・検証を行うことで効果があることがわかる。

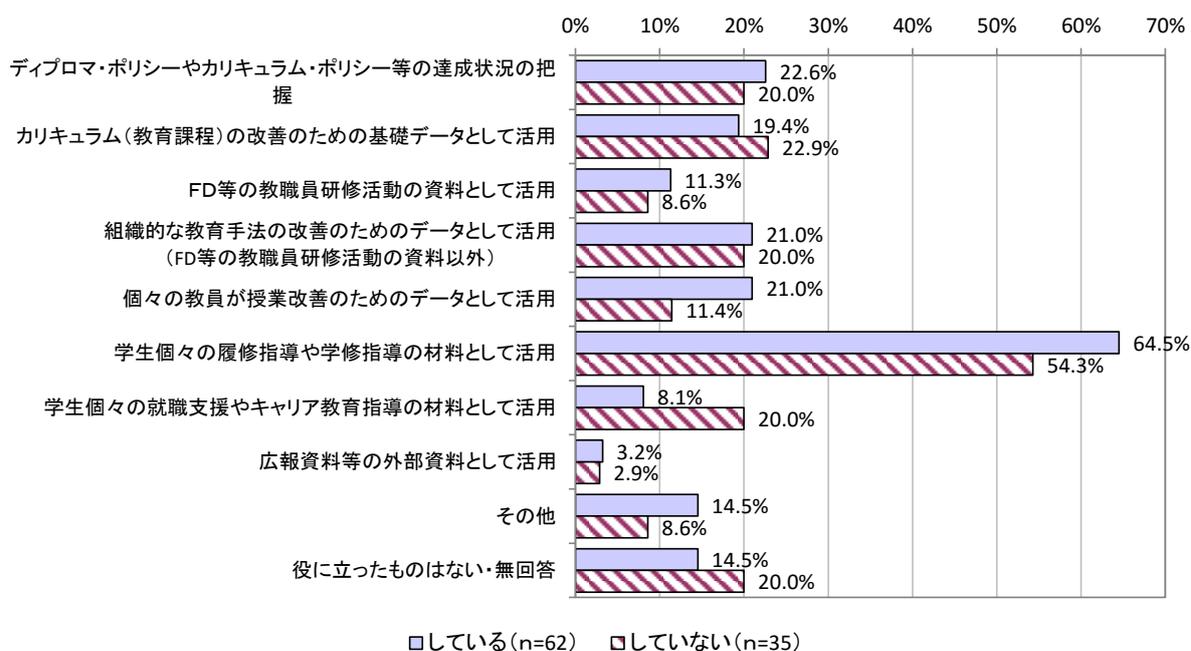
図表 2-21 【知識・基礎学力測定テスト】 他データとの紐づけ分析・検証有無別  
アセスメント・テスト結果の活用方法のうち役立ったもの（複数回答）



図表 2-22 【ジェネリックスキル測定テスト】 他データとの紐づけ分析・検証有無別  
アセスメント・テスト結果の活用方法のうち役立ったもの（複数回答）



図表 2-23 【臨床能力共用テスト・国家試験用模試】 他データとの紐づけ分析・検証有無別  
アセスメント・テスト結果の活用方法のうち役立ったもの（複数回答）



## 2-5-5 アセスメント・テストを実施する上での工夫点

アセスメント・テストを実施する上での工夫点について自由記述できた。

### (1)知識・基礎学力測定テスト

知識・基礎学力測定テストでは、「学生が時間を確保しやすい時期・場所で実施する」や「必修扱いとする、授業・ガイダンスでの実施」「テスト結果を成績に反映する」など強制力をもって実施するケースがあった。この他、「効率的な採点・分析」という工夫がみられた。

分類	活用方法、実施効果(主なもの)
学生が時間を確保しやすい時期・場所に実施する	スマートフォンやPCにて回答できる。
	外部機関が実施するテストであるため、スケジュールの調整が難しく、これまで1月に実施していた。この時期は学期末試験の直前であり、学生によっては負担感が大きかったが、次年度から調整が付き、12月実施が実現可能となった。
	英語力の測定に必要であることを必修の授業内で周知し受検案内を行っているが、未受検者に対しても、電話連絡等を行い別日程を設け、受検率を上げる体制をとっている。
必須扱いとする(授業・ガイダンスでの実施等含む)	在学中に最低3回のTOEIC受検を義務付けている。
	定期試験期間やガイダンスに合わせて実施し、受検時間の確保を試みている。
	大学教育を受ける前の英語力を測るため、入学式直後のオリエンテーションプログラムの一環として位置づけて、受検を必須扱いとしている。
テスト結果を成績に反映する、	アセスメント・テストを授業の成績に反映するなどの対応を取ることで、受検者数を確保することができる。
	実施する科目の成績に10%~20%の割合で成績に入れる基準を作成し、担当教員全員で共有している。
	受検結果の得点を最大30%割合で成績評価に用いている。
効率的な採点・分析	マークセンス方式と読み取りの機材を導入し、採点の効率を上げている。
	新学期実力テストについては、各学年における正答率の上位と下位の設問や、識別指数マイナスの設問を抽出し、設問レベルでの分析・評価を行っている。

分類	活用方法、実施効果(主なもの)
	経年比較を行うため、例年同じ問題を活用している。
	本学の実情に合わせたマニュアルを作成し、効率的な運営を心掛けている。

## (2)ジェネリックスキル測定テスト

ジェネリックスキル測定テストにおいても「必須扱いとする」が多くみられた。また、「テスト結果のフィードバック」「学生が時間を確保しやすい時期・場所に実施する、授業・ガイダンスでの実施」という工夫も多くみられた。

分類	活用方法、実施効果(主なもの)
必須扱いとする	必修科目の時間を活用して実施し、指導している
	1年次は必修授業の中でアセスメント・テストを実施しているため履修者全員がテストを受け、その後授業で内容の解説もしているため実施効果が高い。
	新入生については初年次教育(必修)の授業の一環で実施することとした。
	1年生は、入学時オリエンテーションと期末に必修科目で実施する。2~3年生は、期末に必修科目で実施する。
テスト結果のフィードバック	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テスト結果は全て学生個人にフィードバックしている。</li> <li>・学生の指導に役立てられるよう教職員に対して全体結果の報告を行っている。</li> </ul>
学生が時間を確保しやすい時期・場所で実施する	入学後すぐ、論文提出の少し前など、受検率が上がる実施時期を模索している。
	全学のイベントなどを利用して学生が集まる日程を利用して実施している。

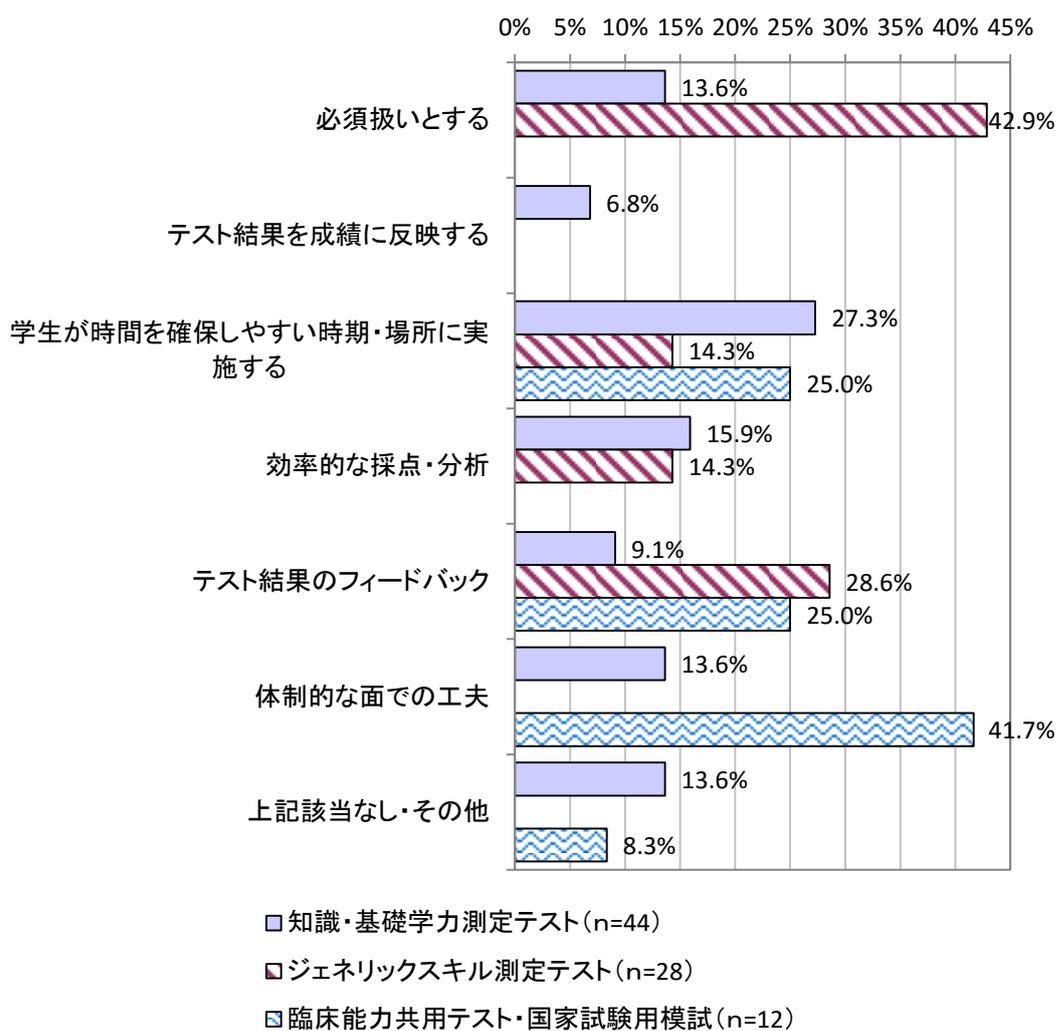
### (3)臨床能力共用テスト・国家試験用模試

臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、担当教員の平準化など「体制的な面での工夫」もみられた。

分類	活用方法、実施効果(主なもの)
体制的な面での工夫	試験監督や補講に係る教員が偏重しないようにしている。
	事前に内部評価者講習会（FD）を開催し、評価の公正さを担保する。
	複数の教員が1領域を担当するので、教員間の評価の「ばらつき」を極力少なくするための事前研修に多くの時間をかけている。
	OSCE 試験（実技試験）では、多くの試験室を準備する必要があるため休日の病院外来を試験会場としている。

参考までに、自由記述の結果を分類してグラフ化した結果は、下記のとおりである。

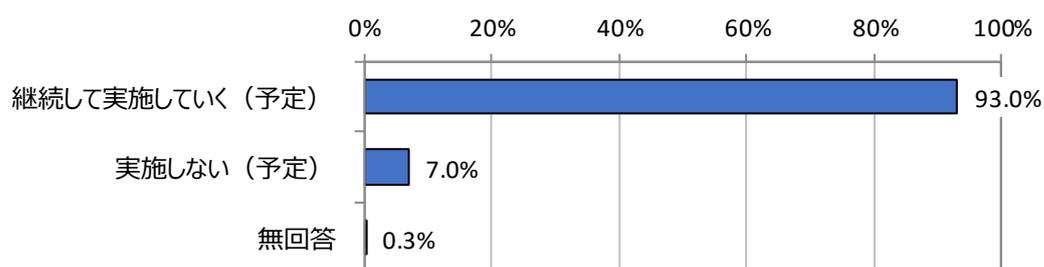
図表 2-24 アセスメント・テストを実施する上での工夫点  
(自由記述の分類。回答のあったもののみ)



### 2-5-6 アセスメント・テストの大学の継続意向

アセスメント・テストの大学の継続意向は、「継続して実施していく」が9割を超えている。

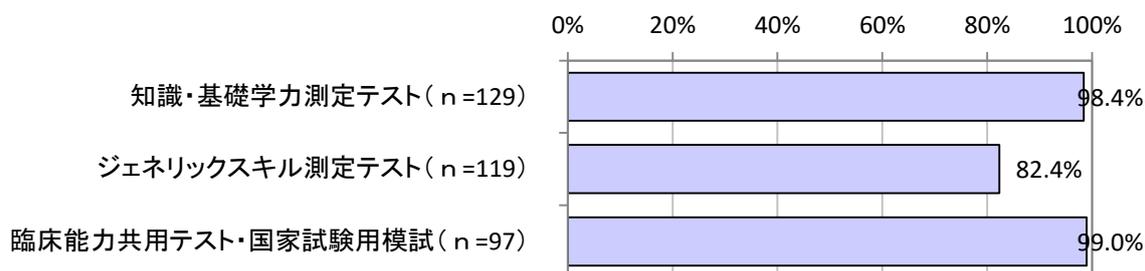
図表 2-25 アセスメント・テストの継続意向 (n=355)



アセスメント・テストの分類別に継続意向をみると、知識・基礎学力測定テストと臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、ほとんどの大学において継続意向がある。

一方で、ジェネリックスキル測定テストでは、2割で継続意向がない。その理由を自由記述でみると、予算的な理由が多くあげられている。

図表 2-26 アセスメント・テストの継続意向



## 2-6 まとめ

### 2-6-1 全体的な傾向

アンケート結果から、大学で実施されているアセスメント・テストの特徴を整理する。実施しているアセスメント・テストの種類は、「民間事業者等の検定試験や資格試験等 (TOEFL、TOEIC 等)」(36.3%)、「ジェネリックスキル等の測定を含む大学等向けテスト」(33.5%)、「臨床能力の共用テスト (OSCE、CBT など)、国家試験用模試」(27.3%)の割合が高い。測定している能力項目については、「汎用的能力」「知識・理解」「専門的な知識」といった項目となっている。

アセスメント・テストの導入目的として、主に「学生個々の履修指導や学修指導の材料として活用」「カリキュラム (教育課程) の改善のための基礎データとして活用」等が多くあげられており、それらの内容で役立ったという回答割合も高い。さらに、アセスメント・テストを他データと紐づけ分析・検証を行っている方が、役立っているという傾向がみられた。なお、アセスメント・テストの結果と紐づけて分析・検証を実施している割合は4割程度であり、「学内の試験の成績」「GPA」「入試成績」といったデータとの紐付分析がなされている。

アセスメント・テストの実施上の課題として、「アセスメント・テストの実施により、教職員の業務が増大」「学生のテスト受検時間の確保が難しい」など、教員・学生の負担についてがあげられている。

### 2-6-2 テストの分類別の傾向

次に、アセスメント・テストを「知識・基礎学力測定テスト」「ジェネリックスキル測定テスト」「臨床能力共用テスト・国家試験用模試」の三つに分類し、その特徴をみた。

その結果、「知識・基礎学力測定テスト」と「臨床能力共用テスト・国家試験用模試」については、「知識を測定する」「学生個々の指導材料として活用」など共通の傾向がみられた (ただし、臨床能力共用テスト・国家試験用模試の方が、実施時期が遅く実施規模も小さい)。課題も「教職員の業務増大が課題」以外にはあまり多くなく、ほとんどで継続意向がある。

「ジェネリックスキル測定テスト」については、汎用的能力や態度などの測定を目的としており、活用も「学生個々の指導」に加え、「就職支援」や「組織的な教育手法の改善」など範囲が広いのが特徴といえる。ただし、学生のテスト受検時間の確保、教育改善などにつながるノウハウ不足、予算など、他のテストと比べて課題も多い。

	能力項目	目的	範囲	規模 (全 国)	実施時期	課題
知識・基礎学 力測定テスト	知識・理解、 専門的な知 識	学生個々の指 導、カリキュラ ム改善	特定の学部 学科全員	13 万人	1,2 年次	教職員業務増大
ジェネリック スキル測定テ スト	汎用的能力、 態度・志向性 課題解決能 力	就職支援、学生 個々の指導、組 織的な教育手 法の改善	様々	13 万人	1 年と 3 年 次	学生のテスト受検時 間の確保、教育改善 などにつなげるノウ ハウ不足、予算
臨床能力共用 テスト・国家 試験用模試	専門的な知 識、専門的な 技術や技能	学生個々の指 導	特定の学部 学科全員	2 万人	4 年次以上	教職員業務増大

## 第3章 ヒアリング事例調査

---

ヒアリングにより、特徴的な取組事例を収集した。

### 3-1 アセスメント・テスト提供機関に対するヒアリング調査

まずは、アセスメント・テストを開発している機関（2社）に対してヒアリングを行った。

#### 3-1-1 ㈱リアセック（キャリア総合研究所 所長 角方氏）

##### (1)PROGについて

㈱リアセックでは、学校法人河合塾と共同でアセスメントツール「PROG」を開発した。専攻・専門に関わらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向（ジェネリック・スキル）を可視化するためのプログラムである。PROGは、知識を活用して問題解決する力であるリテラシーを測定する「リテラシーテスト」と、経験を積むことで身についた行動特性（コンピテンシー）を測定する「コンピテンシーテスト」の二つから構成される。特に、コンピテンシーテストは、「対課題」「対人」「対自己」の3領域に分けられ、客観的な評価が取得可能な手法を用い、測定・評価している。受検者は、延べ60万人を超えている<sup>1</sup>。

PROGのコンピテンシーテストは、企業で活躍している若手社員4000人の行動様式をモデルに作成しており、社会人として成果をあげるために必要な行動スタイル（役割行動）が身についているかを測定することができる。個人の人格を測定しているわけではなく、教育によって成長可能な行動が身についているかを測定することに焦点をあてている。

コンピテンシーテストの結果は、大学間の差よりも学生個人の差の方が大きい。ただし、大学の教育内容によってもコンピテンシーテストの差が生じている。実習やチーム学習など実践的な教育を行っている学部・学科の学生の方が、総じてコンピテンシーの結果や伸びが良いという結果がみられる。

##### (2)アセスメント・テストの利用目的

大学では、これまで、教育改革などを実施しても、その効果（学生をどう育てたか）を測

---

<sup>1</sup> 平成30年3月時点での公表値。

る情報をもっていなかった。GPA や単位などの数値や、就職率や退学率などの間接的なデータも参考にはなるが、教育の直接効果を測っているわけではない。高校卒業後から 4 年間の教育を経て、人間性を含め、大学がどう学生を育ててきたのかを測り可視化する指標は存在しなかった。

大学独自のテストや、ルーブリックなどを用いた主観による評価方法などもあるが、これらの手法については、大学内だけの評価になるため、客観性の担保という課題がある。このような背景から、社会や企業の評価基準によって設計されている PROG が大学において活用されるようになった。

PROG は、まずは教育改革に熱心な教員において使われてきた経緯がある。教育改革などに熱心な教員は、PBL、インターンシップなども含むアクティブ・ラーニング型授業を早い時期から積極的に導入していた。このような熱心な教員は、「アクティブ・ラーニングなどの授業は、学生に対して効果があるという検証をしたい」という考えを持っており、PROG を積極的に活用し、教育改革の学内への説得や社会へのエビデンスのツールとして用いていた。ただし、このような使い方の場合、アクティブ・ラーニングなどの効果が検証できると、アセスメント・テストも役目を終えて実施されなくなることも多かった。また、外部の競争的資金を活用しているケースも多く、事業終了と共にアセスメント・テストも終了するケースも多かった。

アセスメント・テスト (PROG) を定期的・継続的に行う大学では、アセスメント・テスト (PROG) を「学生の育成」のためのツールとして、学生の成長の振り返りのためにテスト結果を使用するケースが多い。したがって、単にテストを受検させるだけでなく、学生に対し PROG の解説会を開催し、PROG の結果の見方を教えるなどを行っている。

この他、IR や大学認証評価のデータとして、PROG を活用するケースも多くはないが存在する。学生の育成の振り返りツールや IR 情報等として、全学的にアセスメント・テストを行っている大学は、教育改革全体の中で、アセスメント・テストをどう使うかを戦略的に考えて使用している。

### (3)大学におけるアセスメント・テストの実施状況

アセスメント・テスト (PROG) を定期的・継続的に行っている大学はいくつかあるが、数は必ずしも多くない。例えば、全学の学生を対象に、1 年生・3 年生に対して行っているケースなどが存在する。

大学が継続的にアセスメント・テストを実施できない理由の一つとして予算の問題がある。文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業（就業力 GP）」や「大学教育再生加速プログラム（AP）」など、学修成果の可視化に対する支援事業は近年、数多く実施されており、可視化のツールを独自に開発する大学もあるが、開発には大変な労力がかかることもあり、これらの事業の一環として PROG が使用されるというケースが増えている。ただし、このような事業で用いる場合は、事業終了後には予算がなくテストが実施できなくなるといった問題も起きている。大学独自の教育研究費や教材費で充当するといったケースもあるが、対応できない大学もある。

学長がリーダーシップを発揮する例や、意欲的な学部が牽引するなど、戦略的に恒常予算にアセスメントテスト・プログラムを組みこんでいる大学においては、アセスメント・テストを継続して行っている。

#### (4)アセスメント・テストの使い方のポイント、メリットなど（角方氏の意見）

角方氏が、教育改革において学修成果の可視化ツールとして PROG を使用した大学に「可視化して良かったことは何か」を聞いた際、その大学の担当教員からは「これまで教員同士が、学生の成長や教育カリキュラムについて、ここまで熱心に議論したことはなかった。教育の成果が目に見える形で示されたことで、教員同士が教育について熱心に議論するようになった」という答えがあったという。テスト結果が数値としてあることで、「この学科の学生の得点は何故低いのか？」といったエビデンス（数値）をベースとした議論が可能になり、結果として教員改革に向けての教員間の議論が活発になったとのことであった。

教育改革に活用するためには、PROG の点数だけを見ても意味がない。授業、部活、アルバイトなども含めて、どういう学生生活を送った学生が、PROG の点数が高いか関係性をみることが重要である。学生調査や企業調査、卒業生調査などとアセスメント・テストを組み合わせ分析していくことがポイントとなる。

なお、リアセックが PROG と入学偏差値の関係について分析したところ、リテラシー項目は偏差値との関係はみられるが、コンピテンシー項目では関係がみられなかった<sup>2</sup>。

また、アセスメント・テストの結果をデータベース化していくことも重要といえる。大規模データ化することで、より詳細な分析が可能になり、例えば、アクティブ・ラーニングは

---

<sup>2</sup> PROG セミナー2014 株式会社リアセック 代表取締役 CEO 松村 直樹 講演資料より。  
<http://www.riasec.co.jp/seminar140629/prog14tokyo2.pdf>

コンピテンシーの成長につながるとしても、個別詳細に見て特にどういう教育手法で効果があるかといったことも明らかにできる。アセスメント・テストのデータ分析の結果を積み重ねていくことで、教育改革の成果検証や新たに取り組むべき課題を分析することが可能になる。

### 3-1-2 ベネッセ i-キャリア（大学生基礎力レポート、GPS-Academic）

#### （1）概要

##### ①大学生基礎力レポート

ベネッセコーポレーションでは、1998年よりアセスメント・テストとして「大学生基礎力レポート（旧名：大学生基礎力調査。2015年より現名称）」を行っている。現在では、この「大学生基礎力レポート」を含め、年間20.7万人<sup>3</sup>がベネッセのアセスメントを受検している。

現在は、大学生基礎力レポートは、ベネッセコーポレーションのグループ会社であるベネッセ i-キャリアが実施している。大学生基礎力レポートは、能力（日本語理解・英語運用・判断推理といった基礎学力中心）を客観的に評価する「能力評価」、自己管理、対人関係、計画実行などの協調的に問題解決を行う経験を主観的に評価する「行動的評価」、学生の大学入学の動機や学校生活の満足度などを測る「アンケート（意識調査）」の三つから構成される。

大学生基礎力レポートの大学における活用のされ方は、時代と共に変わってきている。リリース当初は、主に学生の就職対策として使われており、大学3年生中心に受検がされてきたが、その後、大学においてキャリア教育が重視されるようになると、1、2年生にも受検させる大学が増えてきた<sup>4</sup>。大学は、大学生基礎力レポートを活用して、学生の就職支援やキャリア教育支援などを行っている。

さらに、ここ10年ほどは、大学教育改革の進展を背景に、大学から「学生の実態把握」ツールとして活用したいという要望が増えてきている。そのような要望を受け、これまでは「能力評価」「行動的評価」の二つの評価だったツールに、「アンケート（意識調査）」を加えて、学生のより詳細な実態を把握できるようになっている。

大学生基礎力レポートでは、テストの結果をレポートとして学生にフィードバックできる。学生は、そのレポートを今後の活動の教材として使用できる。さらに、レポートを元にフォローガイダンスを行うことで、学生の振り返りに活用している大学もある。

---

<sup>3</sup> 平成30年3月時点での公表値。

<sup>4</sup> これに伴い、現在では、受検する時期によって大学生基礎力レポートⅠ（主に新入生向け）、同Ⅱ（主に2年生向け）、キャリアアプローチ（主に3年生向け）などサービスを分けている。アンケートの内容が異なるが、「能力評価」「行動的評価」については内容が同じであるため、学生の大学生活を通じての変化を追うことが可能となっている。

## ②GPS-Academic

近年では、大学から三つの方針（「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」「入学者受入れの方針」）に対する評価・検証ツールとしてアセスメント・テストを使いたいという要望も増えてきた。「大学生基礎力レポート」では、客観的評価として「能力評価」を行っているが、これは短い時間で基礎的な力を測定するものであり、「大学教育を通じて身につけた能力（身につけるべき能力）」を評価しているとは言い難かった。

そこで、ベネッセiキャリアでは、「大学教育を通じて身につけるべき能力」を客観的に評価するテストの開発に新たに取り組んだ。その結果、新たなアセスメント・テストとして、「GPS-Academic」（GPS：Global Proficiency Skills program）を2016年に開始した。このテストは、客観的な能力として「思考力」の評価、学生の主観的な姿勢・態度や経験の「行動的評価」、学生の満足度など意識を測る「アンケート」から構成される。

## ③二つのアセスメント・テストの違い

GPS-Academicが大学生基礎力レポートと大きく異なっている点として、「思考力」の測定を行うことがあげられる。思考力に着目した理由として、授業や研究など大学の勉強を通じて身につけられる能力だからである。さらに、思考力は、専門や領域に関わらず、学部横断的に評価できる能力であることも理由といえる。

アセスメント・テストは、対象者に成長のゴールを示す“ものさし”にもなりうる。大学で身につけるべき重要な能力の一つとして「思考力」があるというメッセージにもなっている。これはOECDが提唱する汎用的能力そのものであり、高等教育で育成すべきものである。海外の大学ではアクレディテーションの基準の一つとして活用されている。

思考力は、大学で学ぶべき三つの力から構成される。情報を抽出・吟味し論理的に組み立てて研究を行う「批判的思考力」、グループでの作業等で他者との関わり方を理解する「協働的思考力」、情報を関連付け解決策を生み出す「創造的思考力」である。

GPS-Academicにおける思考力の測定方法は、選択式の問題と、記述論述問題がある<sup>5</sup>。思考力の測定が、文章読解の評価になってしまわないように、文章による出題の他、動画や音声を用いた問題も用意している。

思考力の評価結果の妥当性については、学識経験者からのチェックと、海外における同様

---

<sup>5</sup> 記述・論述問題はオプション制となっている。

のアセスメントツールに関する文献等調査で確認をしている。

GPS-Academic の測定項目

客観評価	思考力	批判的思考力	選択肢 45 分
		協働的思考力	+記述・論述 30 分（オプション）
		創造的思考力	
主観評価	姿勢・態度	レジリエンス	選択肢 10 分
		リーダーシップ	
		コラボレーション	
	経験	自己管理	選択肢 5 分
		対人関係	
		計画・実行	
アンケート		学生意識調査	選択肢 20 分

なお、GPS-Academic の開発の過程では、包括的な意味での「問題解決力」をテストで客観的に測定できないかといったことも検証した。その結果、3～4 時間かけて多くの資料を読み込み、吟味し、判断するようなテストを行うことで評価できることは明らかになった。ただ、そのテストを行うための労力や採点にかかる時間が非常に大きいこともあり、GPS-Academic では比較的短い時間で測定できるものとして「思考力」を定義し、能力測定の項目として採用した。

また、大学教育改革のツールとして使うことを念頭に置いて、客観評価の「思考力」の他に、学生の主観的な行動を可視化する「姿勢・態度」「経験」の測定も行っている。主観的評価の「姿勢・態度」「経験」については、点数の高さに意味があるものではなく、個々の学生や学生群がどのような傾向にあるかを明示化することに意味がある。これらの主観的な評価結果も用いながら、客観評価指標である「思考力」の結果の根拠を探ることが教育の改善につながる。「客観」と「主観」の指標を結びつけて分析を行うことができる。

## (2) 大学生基礎力レポート、GPS-Academic の大学での活用での課題

現状、大学生基礎力レポートや GPS-Academic を実施し、その結果を確認したら終わりと

いう大学も多い。

ベネッセ i-キャリアとしては、大学生基礎力レポートや GPS-Academic などのアセスメント・テストだけを実施して終わりにするのではなく、他の学内情報と組み合わせて分析して欲しいと考えているようである。IR 活動の情報の一つとして活用することで、アセスメント・テストはより意味を持つといえる。

### (3)普及面での課題

大学生基礎力レポートに限らず、一般的な大学生向けのアセスメント・テストの特徴として、大学1年生に比べ、2, 3年生の受検率が低下する傾向がある。学年が上がると、成績評価や検定といった学生にとって直接メリットのあるもの以外は受検意欲が低下してしまう。

GPS-Academic において「思考力」をテストすることについて、大学教員から共感する声は多いという。ただし、学生の思考力が一番伸びるのはゼミ活動や卒論研究を通じてであり、その結果を測るには卒業前後が最も適しているといえるが、この機会を得ることが現実的には難しい（アセスメント・テストの需要は、就職活動前が一番多い）。4年生や卒業生にどのようにしてテストを受けてもらうか、その機会をどのようにして得るかが課題といえる。

### 3-2 大学におけるアセスメント・テスト活用事例

アセスメント・テストを実施している4大学に対してヒアリングを行った。1大学が大学独自でアセスメント・テストを開発したケース、3大学は外部機関が開発したアセスメント・テストを活用しているケースとなっている。

#### 3-2-1 新潟工科大学（基礎学力到達度テスト、人間力セルフチェック）

新潟工科大学において育成する力は、大きく「専門性」「基礎学力」「人間力」の三つがある。「専門性」については、専門科目の授業で学び、ルーブリックで評価を行う予定となっている。「人間力」については、後述する「人間力セルフチェック」で自己評価を行う。「基礎学力」は、「基礎学力到達度テスト」により、企業が求める力に達しているかを測定する。

#### (1)基礎学力到達度テスト

##### ①導入の背景

新潟工科大学は、地元のものづくり企業経営者達の要請により、地域の技術者育成を目的に設立された大学である。9割以上の学生が新潟県出身で、卒業後も8割以上が地元企業に就職するなど、地元企業とのつながりが非常に強い大学である。

常日頃の企業とのつきあいや、企業との対話の場である「対話型企業技術・要素会」、毎年実施している企業アンケート結果から、新潟工科大学の卒業生に対するニーズとして基礎学力（数学・物理・英語）があることが明らかになった。

一方で、企業が求める基礎学力を保有できていない学生も一定数存在した。特に、現状のカリキュラムでは、1年次に数学・物理などの基礎項目の授業が必修であるものの、2年次以降では必修科目ではなく、そのため就職時期には基礎項目について忘れていた学生も少なくなかった。学生が、数学・物理・英語などについて継続的に学ぶような仕掛けが必要であった。加えて、近年、学生の基礎学力レベルのバラつきも課題となっていた。

そこで、平成26年度に文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP事業）」に採択されたことをきっかけに、全学生の基礎学力の到達度を測定する「基礎学力到達度テスト」を実施することとした。AP事業は、基礎学力到達度テストを起点とした「学びのループ」の構築を目的としている。

## ■学びのループ

AP 事業で構築を目指す「学びのループ」の流れは、次の通り。

「1. 自己評価」として基礎学力到達度テスト（年 1 回）と人間力セルフチェック（年 2 回）を受検する。

「2. 自分の能力確認」として、テストの結果をレーダーチャートとしてタブレット端末で確認をする。

「3. 夢や目標の確認」として学生自身が目指す業職種に必要な基礎学力が示される。

「4. 先生との面談」において、テスト結果を元に学習指導を受ける。

「5. 授業を選ぶ」において、テスト結果を元に不足している力が身に付く授業を選ぶ。授業と基礎学力の関係は、カリキュラムマップ（カリキュラムチェックリスト）において整理されている。

「6. 授業を受ける」で力を伸ばし、次年度の「1. 自己評価」へとつながる。

## ②概要

基礎学力到達度テストは、企業ニーズの高い数学、物理、英語の 3 科目を対象としている。テスト内容は、数学であれば「基本的な方程式と関数」「確率とベクトル」「微分」、物理であれば「力学」「熱」「電磁気」といった企業アンケート結果からみえてきた企業ニーズが高い項目を中心に出题される。

基礎学力到達度テストは、1 年次から 4 年次までの学力の伸びを可視化することを目的としており、1 年次から 4 年次の毎年度に行う。

テスト内容は、一般教養の教員が作成した 60 分の問題となっている。現状では、各年度のレベルチェックを目的としているため、毎年の問題は変えていない（ただし、今後検討の余地はある）。英語と物理はマークシートの問題であり、数学については、一部記述問題がある。採点に非常に労力がかかるため、数学もマークシートへの移行を検討している。

## ③テストの流れ

4 月のガイダンス時期に、全学生を対象に行われる。学生には 1 人 1 台タブレット端末が配布されており、テスト結果がタブレットでみることができるようになっている。

テスト結果を元に、教員（助言教員）との面談が行われる。点数が低い学生については、

基礎学力が身に付く授業の履修や、春と夏に実施する対策講習への参加が勧められる。点数が高い学生については、資格取得や海外インターンシップ・留学など自身の能力を伸ばす学習への参加が勧められる。なお、教員へは、「●～●点の場合は、このような指導をしてください（例えば、40点未満：春と夏の対策講習への参加、90点以上：海外インターンシップなど）」という基準が示されたマニュアルが配布されており、教員によって指導の内容が異なることがないようにしている。

#### ④テストの成果

基礎学力到達度テストは、平成 27 年度より開始し、平成 29 年度で 3 年目となっている。全体的には、3 年間でテストの点数は上がっており学生の成長がみてとれる。また、学生アンケートの結果からも「自分の立ち位置が理解できる」「どの分野が得意で、どの分野が苦手かわかるようになった」といった意味があげられており、基礎学力をテストで可視化した効果が表れている。また、教員からも「こんなに学生の力は伸びていたんだ」といった感想もあり、教員側にも可視化の気づきがあらわれている。

前述の企業アンケートの結果は、全体値だけでなく業種別や職種別にも示すようにしている。各学生が目指す業職種に、特に求められる基礎学力や人間力が何なのかがわかるようにしている。基礎学力到達度テストの結果と比較することにより、目指す業職種が求めている基礎学力が身につけているかがわかるようになっている。

なお、テスト結果については、成績への反映は行っていない。

#### ⑤IR 活動への活用

IR 活動の一環として、基礎学力到達度テストの結果と中退率の関係について分析を行っている。「1 年次のテストで〇点以下は中退しやすい」といった分析結果を元に、中退予防対策に使用している。さらには、中退者の月ごとの行動パターン（どんな理由で中退するか）も分析し、学生へのアドバイスの際の参考情報として活用している。

この他、基礎学力と専門性（GPA）についても、ある程度の相関関係はみられた。

基礎学力到達度テストは、平成 30 年度以降の中期計画にも盛り込まれる予定である。例えば、数学が●●点以上が〇人、という目標値の設定も検討している。

## (2)人間力セルフチェック

自己評価で行う「人間力セルフチェック」は、経済産業省「平成 21 年度体系的な社会人基礎力育成・評価システム開発・実証事業」で作成したのが元となっている。これを、文部科学省「大学生の就業力育成支援事業（就業力 GP）」などの事業によりブラッシュアップしてきた。

ただし、これまでは、チェックを受けているのは一部の学生のみだった。そこで AP 事業の採択を契機として、全学的にチェックを行うようにした。

セルフチェックを行う人間力も、企業アンケート等を元に必要な能力を抽出した。「挑戦力」「創造力」「コミュニケーション力」の三分類、二十四項目について自己評価（セルフチェック）を行う。自己評価は、S・A・B・C の四段階で行う。さらに特徴的な項目については、どうしてそう自己評価したかの理由も学生に記載させている。これにより、学生の振り返りにも役立ち、就職活動の際にも役立てることができる。

なお、人間力セルフチェックの結果も、タブレットに取り込んで可視化し、教員との面談に活用する予定である。

## (3)ルーブリックの活用

この他、ルーブリックを作成し、実験のレポート評価や卒論評価など、これまで教員によって異なっていた評価軸を統一する予定である。なお、専門科目の授業ではすでに到達目標に対する到達状況に応じて S・A・B・C・D を設定しており、ルーブリックのような役割を果たしている。

## (4)工夫点など

### ①専門科目と基礎学力との関連付け

専門科目においても、各教員は基礎学力の育成にもつながる工夫をしている。例えば、熱力学の授業では、専門的内容の前に、熱力学で使う微分についても教えてもらうなど、基礎学力と専門科目とが結びつくような内容としている。

教員との面談は、各学年の必修授業である「工学ゼミ<sup>6</sup>」の時間に行われる。必修授業に組み込むことにより、テスト結果が必ず学生にフィードバックされる仕組みとなっている。

---

<sup>6</sup> 工学ゼミ：1～4年の必修の授業。1人の教員についてゼミを行う（所属ゼミは毎年変わる）。工学ゼミは、課題提供⇒ものをつくる⇒発表会⇒教員との面談、というサイクルで行われる。

## ②テスト結果を履修に活用

実施時期は、毎年4月のガイダンス時期に行われる。急いで採点し、実施から1週間程度で結果を配布することで、テスト結果を学生の授業履修に役立てることが出来るようにしている。

もともと1年生を対象に、数学・物理などの基礎科目のクラス分けのためにテストが行われていた。このテストをAP事業の採択を契機に、4年間受ける内容に改良した。

## ③普及面での工夫

テスト開発などにより英語、数学、物理の教員の負担が増えるため、テスト導入について教員の理解を得るのには苦労はあったが、導入の目的を理解していただいた後は、各教員も協力してくれるようになった。

## ④その他、課題など

テストの点数が低い学生、高い学生へのフォローアップは今後の課題といえる。指導は行いが強制力はないため、どうやって学生のモチベーションを保つかを考えていく必要がある。

### 3-2-2 実践女子大学 (PROG)

#### (1)導入の背景

実践女子大学では、前学長の田島氏の下、平成 27 年度より「教育の『質』の転換と内部質保証システムの確立を目指す」教育改革を本格的に開始した。

教育改革は、大きく二つの柱からなる。一つ目の柱は、PDCA サイクルを回し「大学の教育成果の質保証」をしっかりと行うことである。具体的には、教育内容を可視化するために、カリキュラムマトリックス<sup>7</sup>、カリキュラムツリー、ナンバリング等の教育制度導入に着手した。

また、教育の成果を測る手法として、全学ディプロマ・ポリシー版の学修ルーブリック（以下「学修ルーブリック」）や PROG（アセスメント・テスト）を導入することにした。なお、学修ルーブリックや PROG のデータは、最終的には平成 31 年運用開始予定のポートフォリオシステムに取り込んでいく予定である。特に、修学指導及び就職指導に結び付けるという考えがある。



<sup>7</sup> ディプロマ・ポリシーの各項目が、具体的にどの科目によって身につけることができるのかを示したものの。

教育改革の二つ目の柱は、「学生の成長プロセス」である。教育の質を上げることにより、学生の自己成長を促す。その際の学生の「長所と短所を把握」するためのツールとして、PROGを活用する。PROGで自己の現状を把握した上で、カリキュラムマトリックスで必要な授業を選択し、その成長の成果を学修ルーブリックで自己評価していく。



また、教育改革の中で、三つの方針（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）についても見直しを図っている。平成 26 年度から教育理念の再確認を行い、平成 27 年度に見直しを開始し、平成 28 年度から新たなポリシーを運用開始した。現在の全学ディプロマ・ポリシー（DP）は、三つの能力（研鑽力、行動力、協働力）と二つの態度（美の探求、国際的視野）から構成される。これらのうち、三つの能力については、PROG によって達成度を測り内部質保証につなげていく。

〈態度〉

- ・ 多様性を受容し、多角的な視点を以って世界に臨む態度【国際的視野】
- ・ 知を求め、心の美を育む態度【美の探究】

〈能力〉

- ・ 学修を通して自己成長する力【研鑽力】
- ・ 課題解決のために主体的に行動する力【行動力】
- ・ 相互を活かして自らの役割を果たす力【協働力】

## (2)PROG の活用

### ①導入の流れ

平成 27 年度に、PROG の試験的な運用を開始した。200 名程度の学生に対して PROG テストを実施し、その妥当性の検証を行った。就職決定時期や職種などの就職データとの相関関係を検証し、PROG の結果と就職には関係があるという結果が出ており、アセスメント・テストとして妥当であることを検証した。

上記の検証を経て、平成 28 年度から全学的に PROG を導入した。全 1 年生及び 3 年生、及び短大の 1 年生・2 年生の計 2,400 名を対象にテストを行っている。

テスト結果は 5 月末から 6 月に学生にフィードバックする。1 年生には、必修の初年次教育の授業の 1 コマを使って、PROG の結果の読み方等を解説している。3 年生にも就職支援の一環として、結果報告会を開催し、自己分析等に活用している。

### ②分析結果

大学生については 2 年間の実施のため経年変化を分析はできないが、短大の 2 年間の経年変化による分析から「主体的に課外活動に参加している学生はコンピテンシーが成長している」といった結果が明らかになった。今後も成長差分の大きい学生等への追跡調査、分析を行い、成長している学生のモデルを把握し、教育改革に結び付ける予定である。

また、短大の 2 年間の経年変化の分析からも、コンピテンシーの高い学生は「早期に就職先が決定」「総合職の就職が多い」といった結果が出ており、就職の観点からは PROG に妥当性がみられている。

この他、学生アンケートと組み合わせた分析も行っている。

### ③課題

1, 3年生ともに、4月のオリエンテーションの時期に行う。1回100分の時間を確保し、計12～13回のテストを開催する。1年生は全員が受検するが、3年生は受検率が8割にとどまっており、3年生になって受検率が下がることは課題となっている。また、3年生は、結果報告会の参加者数も少なく課題といえる。

PROGの結果に対する学生の反応は、結果をみて一喜一憂するだけとなっており、結果を踏まえて、今後どうするかといったことに考えが及んでいないことが課題といえる。今後はPROGを担当やアカデミックアドバイザーの修学指導の材料として活用し、教員側からどのように使うべきかを議論していく必要がある。

#### (3)アセスメント・テスト (PROG) を学内普及するための工夫

平成27年度の試験運用の際には、学科主任等が集まる全体会議において、PROGの結果の報告を行った。しかし、教員は報告に対してあまり関心を示さず、このままPROGを導入しても結果は活用されずに終わってしまう可能性があった。

そこで、PROGの結果を教員が自分達に関係がある事だと考えてもらえるように、教授会や委員会のような全体的な会議を通じて伝えるのではなく、全ての教員に直接結果を報告することにした。具体的には、カリキュラム構成の最小単位である「学科」単位の結果を集計し、「学科FD研修会」として学科ごとに教員に集まってもらい報告を行った。1学科につき1時間を確保し、前半30分でPROGの結果報告を行い、後半の30分で結果を元に教育にどう反映・活用していけば良いかを議論した。学科単位の集計結果があることで、各教員から指導している学生の様子がよりわかるという意味があった。その結果、各教員により、熱心にPROGの結果についての議論が行われた。

学科FD研修会は今年で2年目になるが、1年目では教員からは「受検者のバイアスがあるのでは？」などPROGの妥当性に関する質問が多くなされたが、2年目になると「どうやったら学生のコンピテンシーを伸ばせるのか」「結果が低い学生は、どう指導していったらいいのか」というように前向きな議論が行われるようになった。

#### (4)アセスメント・テスト (PROG) の結果と教育改革への反映

実践女子大学の学生のPROGの結果をみると、「リテラシー」は高いが「コンピテンシー」

は低いという結果が出ていた。教職員間でもある程度、予想されていた結果ではあったものの、その結果が数字としても把握することができたといえる。

さらに、カリキュラムマトリックスを作成し、カリキュラムと DP の関連を分析したところ、「研鑽力(=リテラシー)」と比べて「行動力」「協働力」(=コンピテンシー)の授業が少ないことが明らかになっており、PROGの結果もこれに合致していた。実践女子大学の教育改革の方向性として「アクティブ・ラーニングにより、学生に主体性を身につけさせる」があるが、この方向性は PROG の結果から見えた課題とも一致しており正しいということがわかった。

PROG の結果と共に、学内のアクティブ・ラーニングの推進も後押しとなり、授業でペアワークなどをやる教員も増えている。これまでアクティブ・ラーニングによる授業があまり行われてこなかった学科でも、アクティブ・ラーニングを推進する動きもある。

また、PROG では「自信創出力」が低いといった結果も出ており、これを踏まえて「授業を通じて、どのように学生に自信をつけさせていくか」といったことについても教員同士で議論されはじめている。

## (5)今後の展開

現在は、PROG の各学生の結果は PDF にして教員に渡しており、教員が修学面談を行う際はこの PDF を活用している。平成 31 年度から開始する新システムには PROG の結果などを取り込んで、データを引き出しやすくし、修学指導に役立てていく予定となっている。

また、現在の PROG テストの能力指標項目は既成の項目を用いているが、次年度以降はこれを実践女子大学のディプロマ・ポリシーの 3 能力項目(研鑽力・行動力・協働力)に組み替えていく。これにより、学生個人も大学全体としてもディプロマ・ポリシーの到達度がわかるようになる。

平成 30 年 4 月より学長補佐として IR 担当を配置することになっており、PROG テストの結果も含めて、全学的な IR 活動を推進していく予定となっている。ディプロマ・ポリシーの達成度の評価指標の一つとして PROG を用いることも決まっている。

さらに、学生を個で育てるエンrollmentマネジメントに力を入れていこうという動きがあり、PROG で現状を測定し、「カリキュラムマトリックス」や「課外活動のメニュー化」といったツールで学生の主体性の育成を支援していく予定である。

### 3-2-3 東京外国語大学

#### (1)取組の概要

東京外国語大学では、平成 28 年度文部科学省「大学教育再生プログラム（AP）テーマ V 卒業時における質保証の取組の強化」に採択されたのを契機に、e-ポートフォリオに学生の学修活動を記録し、卒業時に「多言語グローバル人材ディプロマ・サプリメント」を発行する取組に着手した。<sup>8</sup>

本取組では、東京外国語大学のディプロマ・ポリシーの五つの力を、「言語力」「専門力」「行動・発信力」の三つのカテゴリーに分類し、それぞれの能力を客観的な指標で証明する。

ディプロマ・ポリシー	三つのカテゴリー
I. 高度な言語運用能力	言語力
II. (世界諸地域のうち) 専攻する地域についての知識・理解	専門力
III. 現代社会を生きる力	行動・発信力
IV. (世界の言語・文化・社会を分析するための) 専門的な学問分野についての知識・理解	専門力
V. 主体的に考え、行動し、発信する力	行動・発信力

「言語力」については、英語と専攻言語を TOEIC など各言語に関する外部のアセスメント・テストにより達成度を示す。さらに、ヨーロッパ共通言語参照枠 (CEFR)<sup>9</sup>に準拠しながら、東京外国語大学にて開発が進む言語の達成度の指標である CEFR-J (プロジェクトリーダー・投野由紀夫教授) に基づいて、27 の専攻言語の達成度を可視化する。

「専門力」については、専門分野 GPA や卒業論文、卒業研究などの成果によって達成度を示す。

「行動・発信力」については、留学歴やインターンシップ、ボランティア活動などの活動記録、および外部機関が開発した社会人を測定するアセスメント・テスト (以下、社会人外部試験) の結果によって達成度を示す。

三つのカテゴリーのうち、「言語力」において、TOEIC など言語に関するアセスメント・

<sup>8</sup> 取組の詳細については、<https://tufspods.net/>を参照のこと。

<sup>9</sup> CEFR-Jについては、<http://www.cefr-j.org/>を参照の事。

テストを、「行動・発信力」において社会人力外部試験を、それぞれ用いて達成度を示すこととした。

## (2)アセスメント・テストの実施状況

### ①言語力に関するアセスメント・テスト

言語力を証明するアセスメント・テストとして、TOEIC 及びその他専攻言語の外部検定試験が用いられている。

このうち TOEIC については、1 年生は、4 月入学当初と翌年 1 月の 2 回、2 年生は、学年末の 1 月に 1 回、計 3 回受検させ、各学生の英語力の成長の確認や、大学全体での英語力を示す資料等にも用いていた。

また、学生は、専攻言語についても外部の検定試験を受検している。

### ②行動・発信力に関するアセスメント・テスト

行動・発信力のために、留学籍やインターンシップなどの行動履歴を示すと共に、教員の直感だけではなく、その力がどの程度身についたかを客観的に把握したいというニーズがあった。そこで、社会人力外部試験を導入し、留学等によって主体的に考え、行動し、発信する力が身についたかを測定することとした。

試験は、1 年次の 4 月と 3 年次の 1 月の計 2 回受検することとなっている。これまで、平成 28 年度 1 月（3 年次生対象）と 29 年度 4 月（1 年次生対象）、1 月（3 年次生対象）の計 3 回試験を実施している。1 年次は全員必修、3 年次は任意の受検となっている。

## (3)学修成果の可視化

アセスメント・テストを含めた学生の学修成果については、e-ポートフォリオ「TUFUS Record（たふれこ）」に記録される。これらの記録は、「学修活動履歴書」としてまとめられる。学生は、学修活動履歴書を OB、OG 訪問や就職活動等において自己アピールのための履歴書として活用することができる。

学修活動履歴書は、「言語力」「専門力」「行動・発信力」の三つのカテゴリーから構成されている。言語力では、TOEIC や専攻言語の外部検定試験のスコアと、CEFR-J に基づく 5 技能（聞く、読む、話す（やりとり）、話す（発表）、聞く）の習得状況が示される。専門力では、GPA や重点的に履修した科目などが示される。行動・発信力では、留学籍やインターン



## ディプロマ・サプリメントイメージ

Test

### TUFS Diploma Supplement

The Diploma Supplement is awarded by the Japanese Education Council of Foreign and Home (JCFHE). The purpose of the Supplement is to provide additional standardized data to support the international recognition and mobility of students and professional recognition of qualifications. It gives students the opportunity to provide a structured overview of their studies, to make contacts and apply for other awards that are relevant and to provide additional information on their educational background. Information that is not provided by the institution should be provided by the student. Where information is not provided, the institution should give the reason why.

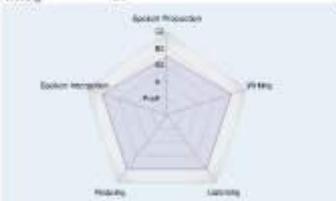
1 Information identifying the holder of the qualification			
1.1 Name (in Japanese):	齊大木 太郎	1.2 Name (in English):	Gaida Tarou
1.3 Date of birth:	1993/06/05	1.4 Student ID number:	6116103

2 Information identifying the qualification			
2.1 Name of qualification:	Bachelor (Language and Area Studies)	2.2 School:	School of Language and Culture Studies / Course of Culture and Literary Studies
2.3 Major, Region / Language:	Middle East / Turkish	2.4 Institution awarding the qualification:	Tokyo University of Foreign Studies, National university
2.5 Language(s) of instruction/examination:	Japanese, English		

3 Information of the level of the qualification			
3.1 Level of qualification:	Bachelor's degree	3.2 Official length of programme:	4 years
3.3 Requirement for admission:	Has completed 12 years of formal education or have been recognised by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan as having acquired equivalent education (The Public Notice of the Ministry of Education No. 353 notified in 1981)		

4 Information on the contents and results gained	
4.1 Mode of study:	Regular student (undergraduate)
4.2 Programme requirements:	125 credits

5 Learning achievements: English		6 Learning achievements: Major Language (Turkish)	
5.1 Learning achievements: English	6.1 Learning achievements: Major Language (Turkish)		
Listening: B2	Listening: B2		
Reading: B2	Reading: B1		
Spoken Interaction: B2	Spoken Interaction: B2		
Spoken Production: B1	Spoken Production: C1		
Writing: B2	Writing: B2		




5.2 Learning achievements: English	6.2 Learning achievements: Major Language (Turkish)
Test name: TOEFL iBT	Test name: Turkish Proficiency Test (Turkish Exam Institute)
Scores: 84.0 (C1)	Scores: C1
OSCE/J level: B2	OSCE/J level: C1
Test date: 2015/04/01	Test date: 2017/01/22

### (4)課題・今後の展望

アセスメント・テストが、まだ一般に広く知られていないこともあり、ディプロマサプリメント（学修活動履歴書含む）に結果を掲載することの意味や妥当性については、学内で議論をしている。

また、アセスメント・テストの結果が学生の思考力を十分に測れているのか、学内で議論があり、課題の提示の仕方や評価軸の適切性なども含め、アセスメント実施者にさらなる開発を要望している。

### 3-2-4 日本大学（GPS-Academic 等）

#### (1) 導入の背景

日本大学三軒茶屋キャンパスは、危機管理学部とスポーツ科学部で構成されている。系統の異なる学部であるが、同一キャンパスということで教養科目や導入教育などは同一のカリキュラムで行われている。

同キャンパスでは、平成 29 年度より「三軒茶屋ラーニング・イニシアティブ（SLI）」の取組を開始した。SLI は、①履修体系図と科目ナンバリング、②コモンルーブリック<sup>10</sup>、③成績ターゲット、④ラーニングセンター設置からなる。さらに、SLI に関して履修体系図やコモンルーブリックについて解説した「三軒茶屋ラーニング・イニシアティブ・マニュアル(slim)」を発行した。コモンルーブリックについては、四つのマインドセット、十六のスキル/ナレッジ、合計二十のコンピテンスからなる。なお、コンピテンスはアメリカの AACU<sup>11</sup>の成果などを参考に作成した。

#### 日本大学三軒茶屋キャンパスにおけるコモンルーブリック

コンピテンス		コード		コモンルーブリック	
		コンピテンス	ルーブリック	ルーブリック	コンピテンシー
マインドセット	日本の精神文化を理解し多様な価値を受容する姿勢	A	A1	グローバル感覚	文化的自己意識、グローバルな視座、異文化への共感、文化的多様性への理解
	自己の特性を理解し社会に貢献しようとする姿勢		A2	異文化適用	異文化への好奇心、受容性・寛容性、言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーション、異文化間への協働
	他者理解・倫理観・公共心	B	B1	自己啓発	アイデンティティの確立、感性（センス）の研鑽、目的・目標の設定と管理
スキル/ナレッジ（自ら学び、考え、道をひらく力）	文化的素養・市民的教養	D	D1	市民的素養と参加	倫理的自己意識、倫理的課題の認識と構造把握、倫理的視点・概念の適用、社会認識
	学識・専門技能	E	E1	学識と専門技能	コミュニティと文化の多様性、知識の獲得、知識の分析と市民参加への応用、市民としての自覚と関与、市民参加のためのコミュニケーション、市民的行動と省察
	探求力・課題解決力	F	F1	探求と論拠	自律システム思考、メタ認知、知識の取り出し、知識構造理解、知識分析、知識活用
			F2	課題解決	テーマ設定、既存の知見・研究・観点、プロセス・デザイン、分析と論拠、結論、限界と示唆
	状況把握力・判断力	G	G1	状況把握	問題・課題の特定、解決の方略と仮説、代替的解決方法の検証、解決の実行、結論の評価、結果の派生的影響
	論理的思考力・批判的思考力	H	H1	論理的思考	自己認識、前提条件・制約条件、対立の発見と解消、最適化、規範的考慮
			H2	批判的思考	論理的なプロセスと操作、問題・課題の定義と分析、解決法・仮説の提示、解決法の評価と選択、結果の検証
	理解力・分析力	I	I1	理解・分析と読解	争点の明示と説明、根拠の収集と損取、推論と文脈の考慮、立場と観点、結果と成果
			I2	量的分析	内容理解、文脈構造の分析、ジャンルの特性、解釈、読者の声
			I3	情報分析	解釈、表現、コミュニケーション、計算・演算、応用・分析、仮説
	創造的挑戦力・達成力	J	J1	継続的学修基盤	情報の範囲と性質の決定、情報の入手、情報及びその源泉の評価、情報の利用、倫理的・法的問題の評価
			J2	創造的思考	好奇心、自発性、自立性、転移、継続と省察
	表現力・対話力	K	K1	ライティング・コミュニケーション	リスクテイク、目標設定、矛盾の受け入れ・止揚、革新的思考、関連付け・統合・転換
K2			オーラル・コミュニケーション	目的及び文脈の理解、構成・内容の展開、ジャンルと分野固有規律、引用と出典、統語法と洗練	
協働力・牽引力	L	L1	チームワーク	内容の構造化、言葉選び、話し運び、補助資料作成、中心的メッセージ	
省察力	M	M1	統合的・応用的学修	対話への参加、他者による貢献の促進、信念とビジョンの提示、建設的な雰囲気醸成、内部的対立への手当て	
					知識と経験の連絡、専門領域の知識の連絡、転移、統合的コミュニケーション、自己評価と省察

[出所] 三軒茶屋ラーニング・イニシアティブ・マニュアル（slim）

<sup>10</sup> 履修体系図を用いて、全ての授業において、何のコンピテンスが身に付くかを整理。

<sup>11</sup> Association of American Colleges & Universities（全米カレッジ・大学協会）

コモンルーブリック等を導入したことにより、学生への教育も変わることとなる。これまでの教育では、専門知識の獲得に重点をおいていたが、これからはコンピテンスの獲得も意識して授業を行うこととなる。また、成績ターゲットの概念を導入し、成績評価の際には目標とするコンピテンスを何%獲得できているかについて評価を行う。そのため、教員の学生への指導についても、最終的な結果だけを評価するのではなく、学生のコンピテンスの獲得プロセスを細かく見ていくことが必要となる。

コモンルーブリックを新たに導入したことにより、導入後の教育効果の検証（コンピテンスの評価）をしていく必要が生じた。そこで、SLI 導入によるコンピテンス育成効果を測るためのツールとして、ベネッセ i キャリア社の GPS-Academic を活用することとした。

さらに、学生が個々の授業を通じてどの程度コンピテンスを獲得できているかを把握しながら、教員は指導を行うことが必要になるため、個々の授業についてもコンピテンス育成に対する効果を測定する必要があった。そこで、個々の授業のテストについても、コンピテンスも評価できる形に改良していく方向性が模索されている。

## (2)GPS-Academic の活用状況

SLI 導入の全体効果の評価するため、平成 29 年度から GPS-Academic を導入した。年度初めのガイダンスにおいて、1, 2 年生 1300 人全員必修で GPS-Academic を受検させた。なお、平成 30 年度には、1~3 年生が全員、受検する予定となっている。

テスト結果は、学生にレポートの形でフィードバックしている。また、ガイダンスや導入教育においてコンピテンスの説明を行うなど、テストの意味についても学生に説明している。GPS-Academic の結果は、学生に対しては個人の振り返りのためのみに使用し、成績等には反映させない。

テスト結果を用いてのカリキュラムの評価検証については、今後、IR 組織を立ち上げて行っていく予定としている。SLI 導入による学生の成長状況やカリキュラムの検証、入学段階での状況把握によるアドミッション・ポリシーの妥当性の検証を行う。

なお、GPS-Academic では、20 のコンピテンスのうち、16 のスキル/ナレッジの評価を行う。マインドセットについては、別途、少人数クラスにおける教員評価などを想定している。

アセスメント・テスト実施の課題としては、学生の負担が大きいことがあげられる。テスト時間が長く論述形式のテストのため、学生によっては集中力が続かない例もみられた。特

に1年生については、コンピテンスは、学生がこれまで行ってきた勉強のスタイルと大きく異なるため戸惑うこともありうるため、ガイダンス等を通じて、学生にコンピテンスを身につけ評価検証する意義を伝えていく必要がある。

### (3)授業でのテスト等の改良

これまでの授業では、テストやレポートによって学生の知識を測り、その結果で成績評価を行っていたが、SLIを導入し、「知識の獲得方法」や「情報の抽出・分析能力」など、これまでテストで答えを導出するために用いていた能力（コンピテンス）そのものを測定・評価し、指導につなげることが求められるようになった。即ち、従来のテストの答えだけでなく、その答えの導出プロセスをきちんと身につけているかを測定する必要が出てきた。

そこで、SLIに関わる教員を中心に、新たな授業評価のためのテスト開発に取り組んでいる。例えば、「学識と専門技能（専門分野にかかる理論知と実践知を獲得し利用する能力）」というコンピテンス項目を測定するテストとして、「どの情報を用いると問に回答できるか」を問う質問を作成している。また、「理解・分析と読解（文章表現における意味と含意を抽出し、分析及び理解する能力）」というコンピテンスを測定するテストとして、「多数の情報を提示し、その中で必要な情報だけを用いて正解を導き出す問題」を作成している。

テストの作成は、これまでの授業のやり方や、どのコンピテンスが身に付くかなど授業の構成要素の確認にもなり、教員の振り返りにもなっている。また、テストを受検させて、「学生はこのコンピテンスが身に付いていない」など、通常のテストでは見えてこないことも明らかになっている。

ただし、これらの問題は、作成、採点に非常に労力・時間がかかるという課題もある。問題をある程度定型化し共有していくことが今後の課題となっている。FD研修等で事例を見せながら、教員間で共有を図っていく予定である。

## 第4章 分析・考察

これまでの調査結果を踏まえ、我が国の大学におけるアセスメント・テストの実態、及び活用に向けた課題・ポイント等を整理する。

### 4-1 アセスメント・テストの活用の分類

アンケート結果から、大学におけるアセスメント・テストは、大きく「知識・基礎学力測定テスト」「ジェネリックスキル測定テスト」「臨床能力共用テスト・国家試験用模試」の三つに分類できる。

知識・基礎学力測定テスト	主に①②③のいずれか（または複数）
ジェネリックスキル測定テスト	主に④
臨床能力共用テスト・国家試験用模試	主に⑤

種類	回答例
①学校独自で作成したアセスメント・テスト	学内模試、必須学力統合試験(総合学力試験)、学生の学修に関する実態調査アンケート、新入生に対する学力確認試験、専門知識習熟度テスト
②外部機関の大学等向けプレイスメントテスト	プレイスメントテスト、IRT診断テスト、VELC テスト、Achievement Test、EMaT工学系数学統一試験、SPI
③民間事業者等の検定試験や資格試験等 (TOEFL、TOEIC等)	TOEFL、TOEIC、土木技術検定試験、統計検定試験、全経簿記試験
④ジェネリックスキル等の測定を含む大学等向けテスト	PROGテスト、大学生基礎カレポート、学生共通調査(大学IRコンソーシアム)、コンピテンシー診断「SPROUT」
⑤臨床能力の共用テスト(OSCE、CBTなど)、国家試験用模試	医療系大学間共用試験(CBT・OSCE)、薬剤師国家試験模擬試験、全国看護師国家試験模試
⑥その他	プレイスメントテスト、IRT診断テスト、VELC テスト、Achievement Test、EMaT工学系数学統一試験、SPI

なお、アセスメント・テストのうち、大学独自で作成している事例は、全体の18%にとどまり、多くは外部のテストを活用していた。また、大学独自で作成している事例のほとんどが、①の回答例のように知識や基礎学力を測定する内容のテストとなっている。

大学独自でアセスメント・テストを作成する利点として、「学校が身につけるべき」と考え

ている知識や技能（例えば、就職先の企業が求める知識・能力）を測定できる点があるが、労力がかかる点が課題となる。

一方で、外部のアセスメント・テストには、自大学以外の結果との比較可能性や、独自作成と比べて労力がかからないことなどが利点としてあげられる。ただし、予算の確保などが課題となることもある。

#### 4-2 アセスメント・テストの活用状況

##### (1)アセスメント・テストの種類別の活用方法

アセスメント・テストを実施している目的を見ると、アンケート結果では「知識・基礎学力測定テスト」と「臨床能力共用テスト・国家試験用模試」については、「知識を測定する」ために行い、「学生個々の指導材料として活用」している割合が高かった。

なお、「知識・基礎学力測定テスト」は、1,2年次に実施されることが多く、知識測定後に、クラス編成等に使用するケースも多くみられた。

一方、「臨床能力共用テスト・国家試験用模試」は、「臨床実習のための能力・適正把握」あるいは「国家試験対策」のために活用され、医歯薬など6年制の学部での利用が多く4年次以上で実施されている。

「ジェネリックスキル測定テスト」については、他の二つと異なり、汎用的能力や態度などの測定を目的としている。活用についても「学生個々の指導」に加え、「就職支援」や「カリキュラムの改善」など、様々な分野に活用していることが特徴といえる。

##### (2)課題

アンケート結果では「知識・基礎学力測定テスト」と「臨床能力共用テスト・国家試験用模試」については、「アセスメント・テストの実施により、教職員の業務が増大する」ことを課題とする割合が最も高い。

一方で、ジェネリックスキル測定テストについては、「学生のテスト受検時間の確保が難しい」「テストの結果を教育改善などにつなげるノウハウがない」「アセスメント・テストを行う予算が足りない」「学内の教職員にアセスメント・テストに対する理解が進まない」など、他の二つと比べて課題の種類も多くなっている。

### 4-3 活用におけるポイント

アンケート及びヒアリング結果から、アセスメント・テスト活用のポイントを整理した。

#### 4-3-1 活用ポイント

##### (1)測定するのは、大学教育で成長させたい能力等

アセスメント・テストは、その能力を測定・評価（アセスメント）すること自体が、その能力が重要であるという学生へのメッセージになる。そのため、アセスメント・テストは、（特に外部のテストを活用する場合は）やみくもに実施するのではなく、大学として学生に身につけて欲しい能力を測定するテストであるかどうかを見極めたうえで実施することが望ましい。

##### (2)学生へフィードバックを行う

アセスメント・テストの第1の目的は、「学生の育成」のためのツールとして使用されていることにある。学生の成長の振り返りのためにテスト結果を学生に見せる際に、特に学生になじみのないジェネリックスキルなどについては、単に結果（点数）だけを学生に伝えるのではなく、学生に対しアセスメント・テストの解説会を開催するなど、テスト結果の見方なども学生に教えながらフィードバックすることが望ましい。

##### (3)履修やクラス決めの参考にする

基礎知識・能力を測定するテストでは、学生の履修の参考情報として提供したり、テスト結果を授業のクラス配置の参考情報として使用することも多い。

上記目的のためには、アセスメント・テストは、4月のガイダンス時期に行う必要がある。採点をできる限り早く行い、結果を学生にフィードバックすることで、学生の授業履修に役立てることが出来るようにしているケースもある。

##### (4)教員の議論の活性化の材料

ヒアリング結果からは、「アセスメント・テストにより、教育の成果が目に見える形で示されたことで、教員同士が教育について熱心に議論するようになった」といった効果も聞かれた。アセスメント・テストの結果は、学生に返却して終わりではなく、その結果を（例えば学部ごとの集計結果などに）まとめて、FD研修等での材料に使用することで教育改革等にお

ける教員間のコミュニケーション・ツールともなりうる。

#### (5)カリキュラム改革や大学教育改革等の検討材料

カリキュラムの改善や大学認証評価のデータとして、アセスメント・テストを活用するケースもある。大学では、三つの方針（「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」「入学者受入れの方針」）に対応した教育ができていないか評価・検証が必要になっていることもあり、その評価材料としてアセスメント・テストの結果を用いている大学もある。

カリキュラム改革や大学教育改革等の検討材料として活用する際に重要なのは、アセスメント・テストの内容を、カリキュラムにおける教育目的や卒業認定・学位授与の方針で示している能力等との紐付けを行っておくことである。カリキュラムマトリックスやルーブリック等を整備する中で、アセスメント・テストが何を評価・検証するものなのか、実施前に明確にしておくことが重要である。

#### (6)アセスメント・テストは、他のデータとの紐付け分析が重要

アセスメント・テストの結果は、IR活動の有効な情報の一つといえる。アセスメント・テストの結果を有効に活用するためには、テスト結果を単独で確認するだけでなく、他のデータと紐付けを行うことが望ましい。

アンケート結果を見ると、他データとの紐づけ分析・検証の実施状況は、臨床能力共用テスト・国家試験用模試では、6割以上で実施されており、主に「学内の試験の成績」との紐付け分析を行っている。知識・基礎学力測定テストやジェネリックスキル測定テストでの分析は、3～4割程度に留まっている。

一方で、他データとの紐づけ分析・検証を行っている方が、アセスメント・テスト結果の活用で役立っている割合が高いという結果があり、他データとの紐づけ分析・検証を行うことが効果的であることがわかる。

ヒアリングやアンケートの自由記述から分析の例を見ると、例えば学生生活調査などと組み合わせ、どのような学生生活（授業、課外活動、部活、アルバイトなども含めて）を送った学生が、アセスメント・テストの点数が高いのかを分析し、その後の教育改善や就職支援に役立っている。この他、アセスメント・テストの結果と中退率の関係を分析し、1年次のテストで〇点以下は中退しやすいという結果を元に、中退予防対策に使用しているケースもある。

#### 4-3-2 課題に対する対応策

課題としてあげられていた教員や学生への負担軽減のための対応策として、以下のような方法があげられる。

##### (1)教員の負担減

「知識・基礎学力測定テスト」と「臨床能力共用テスト・国家試験用模試」については、「教職員の業務が増大する」が最も大きな課題であった。これに対し、例えば、担当教員の平準化などにより、1人あたりの教員負担の軽減を行うケースがあった。この他、テスト当日の運営を事務職員が担当する、マークシート化して採点業務を簡略化する、などの工夫もあった。

##### (2)学生の参加率の上昇

特に、新たにアセスメント・テストを導入した大学においては、学生の参加率が課題となっている。学生の参加率の上昇に向けては、「ガイダンス時に行く」「受検を必修扱いとする」「結果を成績に反映する」等の強制力をもたせて受検させるケースがみられる。

任意参加のテストについては、「学生が時間を確保しやすい時期・場所で実施する」「幅広い日程を設定する」などの工夫がある。さらに、アセスメント・テストの意義を説明し、学生への参加意欲を高めることも重要である。

##### (3)アセスメント・テストのシステム化

教員の負担減や学生の参加率の向上を目的に、アセスメント・テストに関するシステム導入に取り組む学校の事例もあった。

具体的には、テスト受検や結果閲覧をスマートフォンやタブレット端末で行えるようにし学生の利用率を高めたりしているケースがある。一方で、受検申し込みや本人確認は携帯電話を活用し、回答・採点等はデータ集計機を通じてデータベースに蓄積されるなど、教職員側の負担軽減につながるシステムを構築している例もある。

この他、アセスメント・テストのテスト結果を、ポートフォリオシステムに取り込んで、学生の学修支援に役立てるケースもある。